



TITLE:

<<Autre chose>>あるいは<<ex(-)
)pliquer>>: 『固定観念』のフォル
ムを読む

AUTHOR(S):

石田, 靖夫

CITATION:

石田, 靖夫. <<Autre chose>>あるいは<<ex(-)pliquer>>: 『固定観念』の
フォルムを読む. 仏文研究 1987, 18: 143-184

ISSUE DATE:

1987-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137724>

RIGHT:

《Autre chose》あるいは《ex(-)pliquer》

——『固定観念』のフォルムを読む——

石 田 靖 夫

《Destinée. L'homme s'engage d'abord dans ses géodésiques sensorielles et animales.》¹⁾

《Chose, cause. Ce fut jadis le même mot. Rien de plus significatif que de dire de quoi que ce soit : *c'est une cause.*》²⁾

序論

エフェソス出身の古代の医者ルーフスはその『問診法』において次のように述べている。「患者に対しては問診をする必要がある。(中略)これによって患者の精神状態がどの程度まで病んでいるか健全であるかがわかる。(中略)だがもしある事柄を尋ねて患者が別の事柄を答えたり、話している間に言ったことを忘却したり、言葉がふるえたり明瞭でない場合、(中略)すべてこれらは錯乱の徴候である。」³⁾常識に属する事柄を引用したのは、医者と患者との間の治療の場における対話の有様に改めて注意を促すことによって、他でもない、これから読み進めようと思うヴァレリーの『固定観念』⁴⁾に照準をつけるためである。

この作品はプロローグと対話部とから成っており、その対話部において《私》(ヴァレリー自身)と一般医学に携わる《医者》(モデルはヴァレリーの知人でパリの精神科医 Louis Bour)⁵⁾とが、あたかもそこが治療の場であるかのように言葉を「交換」(《échange》)(p. 7)している。もっとはっきり言えば、題名にある《固定観念》に苛まれている《私》と知己の《医者》とがそれぞれ患者と精神科医の役割を引き受けることによって、話が展開するという仕組みになっているのである。そのとき、《私》は、《医者》からの質問に対し、あるときは正面から、あるときはそれを回避する形で応じ、そればかりか、《私》の方から《医者》に挑みかかるような文句さえ吐く。すなわち、《患者》としての《私》は単に《医者》に対して一方的に受動的立場に立たされるのではなく、能動的に、従って、意図的に応酬している。このことによって、両者の対話は、治療の場そのものを、ある精神医学史的視野を背景にして、逆説的に、より鮮明に浮かびあがらせてもいる。このような意味で、ルーフスの勧告にあるように、『固定観念』を読み解く上で最も有効な接近方法のひとつは、読者が言わばもう一人の医者となって、対話＝問診の生理と

＜Autre chose＞ あるいは ＜ex(-)pliquer＞

も言うべき質疑応答の機微、とりわけ、話頭の転じ方に着目することである。実を言えば、読者をそのような方向に導くアリアドネーの糸を提供してくれるかに見えるのが、誰であろうヴァレリー自身であった。『固定観念』（初版1932年）の再版（1933年）に付せられた序文の中で、作者は自作について次のように言う。

「On n'y propose pas du tout à la réflexion du lecteur les *idées* que nos hommes à la mer s'envoient et se renvoient, mais cet échange même : elles ne sont que les accessoires d'un jeu dont la vitesse est l'essentiel.」⁶⁾(pp. 7-8.)

しかしながら、話題の内容である＜観念＞が＜アクセサリー＞にすぎないというヴァレリーの言明をそのまま鵜呑みにすることはできない。なぜなら、『固定観念』の対話部における話題の目まぐるしい変転は、＜私＞と＜医者＞との間の、話題の内容を契機とした、ある心理的反応を、光の屈折にも似た話頭の転じ方として反映しているからである。さらに、そうした＜観念＞のいくつかは、あるテキスト群を指示対象に持つと言ってよいからである。従って、以下の行論においては、上記の理由から、＜迅速さを本質とするゲーム＞としての＜交換＞のいくつかの局面に関して、交換を推進している速度を減速させることによって、観念およびその必然的反応である話頭の転じ方をクローズ・アップし分析を施してみたい。そうであってこそ、ヴァレリーの指摘する＜交換＞の重要性も、ひいては、『固定観念』のフォルムそのものも自ずと見えてくると言わねばならない。⁷⁾

Ⅰ ヴァレリー対フロイト

＜私＞と＜医者＞とが言葉を交わすその交換は、話頭を転じる仕方において屈折に満ち満ちている。この屈折は、その結果である話題の多岐性と相俟って、ヴァレリーが序文で言うように日常会話の常態をそのまま再現したまでのことと言ってそれで済ませておくには、あまりにも機略に富んでいる。たとえば、『固定観念』の英訳本の序文で、フィリップ・ホイールライトは、二人の交換を、＜ほとんど対等なと言ってもよい論争相手の間で親密にくり広げられる格闘競技＞と呼んでいる⁸⁾。両者の攻防を話頭の屈折に注目して分析することにしよう。

対話部のはじめの方で、＜私＞が＜医者＞の患っている＜活動病＞（＜医者＞は片付けるべき仕事のあるなしに関係なく、何かをしないではいられない病氣と解説している(p. 20)）⁹⁾のことを聞きだした後、今度は＜医者＞の側から、＜あなたの方はどうですか＞(p. 21)と矛先を向けられると、＜私＞は、＜Moi?... Laissons Moi... [...]＞(p. 21)という具合に返答を回避したにも

かわらず、少し先で次のような文句をふと漏らす。

<[...] Comment se guérir d'une idée?>¹⁰⁾(p. 22)

この<ある観念>が作品の題名にもなっている精神医学用語の<固定観念>を指すことは、対話部の前にあるプロローグを読み終わった後であるだけに、自ずとわかるようになっている。つまり、<私>は、対話の際中でも、自分をここ、海岸まで引きずってきた¹¹⁾固定観念を忘れ去ることができないため、前言とは矛盾する言葉を我にもなく吐くのである。そのことは、<私>の半ば無意識的な心中の吐露のすぐ後に続いて芝居のト書きのように挿入されている次の文章によって補強される。

<Le Docteur me regarda. Je regardai la mer.>(p. 22)

最初の単純過去は、<私>が先の文句を言う少し前まで<医者>の視線が<私>の方に向けられていなかったか、もしくは、少なくとも、<医者>が<私>の方を見ていたにしても、その瞬間、さらに注視したことをほのめかす。いずれにせよ、<医者>が<私>に視線を投げかけたのは、<私>の発言の間にある矛盾と思ひもかけなかった心中の表白とを目ざとく察知し、注意をかき立てられたからである。しかし、当の<私>とは言えば、<医者>の視線を支えない。<医者>の身振りが<私>の言葉に対する反射運動であるとすれば、その運動に呼応する<私>の反応は、同じく反射運動であるにしても、そこには屈折がある。そして、<私>の言葉が我にもなくなのは、ト書の部分に続いて、<Enfin, en quoi consiste au juste votre mal?>(p. 22)と、<私>が<医者>から<活動病>の説明をすでに受けていたことを忘れたかのように、ちぐはぐな質問をしていることから明らかだろう。自らの失錯行為に事後に気づいた<私>のうろたえ振りが視線を逸らすという行為となって表出されるだけでなく、対話の筋道に合わない質問を<私>にさせてしまうことによって、失錯行為をさらに重ねさせる破目に<私>を陥れてもいるのである。この場面は、以降の交換に活力を与え、<私>と<医者>との間でくり広げられる、ある特徴的な攻防を予告している。

<私>が<医者>に<治療医学史> (p. 133)を書くように強く推める¹²⁾と、<医者>はものを書くことなど畑ちがいだと言って固辞する。それに続く二人の交換を引用してみる。

M : <[...] , Docteur... Prétendez-vous vous prévoir jusqu'à l'an prochain? Ce que je vous dis là va travailler en vous...>

D : <Dans le Sub?... Je suis bien tranquille.>(p. 114.)

〈医者〉の返答にある〈Sub〉とは、テキストの前の方でもほのめかされているように (p. 82), 〈subconscient〉である。エレンベルガーによれば、〈subconscient〉という言葉をはじめて使い、〈意識下固定観念〉 (idée fixe subconsciente) と名付けられた観念を催眠、自動書字、自動談話などを通して患者に自覚させることによって精神療法を实践したのは、ピエール・ジャネである¹³⁾。ジャネの方法はブロイアーのカタルシス療法とともに、フロイトに精神分析の自由連想法を創案させる契機となったもののひとつであるが、当時の精神医学的状况において、メスメルの磁気術を経た催眠術の適用に関係する。上に引用した二人の交換は、治療法として催眠術を導入した精神医学史の文脈から見れば、たとえば、ベルネームの実験で有名な〈後催眠暗示〉のもじりである。それは、テキストの少し後で、〈医者〉が〈Voilà que vous essayez de me suggestionner...〉 (p. 115) と言っていることで、より一層明白となる。何故、もじりかと言えは、このような〈暗示〉を行うのは、精神科医の方ではなく、その患者である〈私〉の方であり、その暗示行為が二人の間で見え透っているからである¹⁴⁾。そして、〈後催眠暗示〉は1889年のナンシー留学において、リエボー、ベルネームの下でのその実験を見学したフロイトに、無意識の存在を証明する心的現象のひとつでもあった¹⁵⁾。無意識の存在の証明となる心的現象には、他に、〈言い違い〉があるが、〈医者〉は次のように言う。

«[...] Eh bien, le même événement mental, qui, physiologiquement, est, ou devrait être, assimilable à un déchet, qui est un produit de fatigue, d'épuisement local, un hasard, une réponse locale comparable à un lapsus linguae, peut, *d'autre part*, prendre une valeur, ... littéraire, par exemple...» (p. 61)

フロイトは『精神分析入門』で失錯行為について、〈精神分析の観察の資料〉が、〈現象界の層のようなものから成り立っている〉(強調筆者)と述べ¹⁶⁾、言い違いを含めた失錯行為を、〈疲労〉などの生理学的視点からだけで説明するのでは、失錯行為の意味を理解することができないと、精神分析学的接近法のこの現象における価値を強調する¹⁷⁾。又、失錯行為のひとつ、言い違いは詩人の作品の中で重要な役割を演じるとして、シェイクスピアの『ペニスの商人』を分析したオットー・ランクを引用している¹⁸⁾。そのシェイクスピアの名を、〈私〉は、〈医者〉の言葉の最後〈valeur... littéraire〉を受けて、〈Merci!〉 (p. 61) と答えた後、〈On dira : c'est du Shakespeare!〉 (p. 61) という形で挙げている。〈私〉はヴァレリー自身と言ってもよいので、〈Merci!〉は、詩人ヴァレリーから礼を言っているのである。しかも、シェイクスピアの名を言うのに〈On dira〉と付け足しているのは暗示的である¹⁹⁾。注意しておかなくてはならないのは、作者ヴァレリーは〈医者〉にフロイトがその限界を指摘した失錯行為に関する生理学的説明をさ

せ、表面的には、精神分析学的説明、すなわち、無意識的過程としての失錯行為の意味については言及させていないことである。だが、＜私＞に対しては、すでに指摘したように失錯行為を犯させている。フロイトの名前は挙がっていないものの、内容からして明らかに精神分析の言及とわかる箇所がテキストにある。＜私＞が＜医者＞に夢について時には反省したことがありますかと尋ねた時、＜医者＞は次のように答える。

＜En voilà, des phénomènes à la mode!... Nous aurons bientôt une chaire d'Oneiromancie à la Faculté. [...]＞(p. 63.)

『固定観念』が出版された1932年までの精神分析学のフランス移入という歴史的文脈において、＜医者＞の言葉が想像させるテキスト内・外の意味連関が問題となる。＜夢占い＞（＜講座＞）は、言うまでもなく、フロイトの『夢判断』が1926年に仏訳されて評判になったことを思わせるし、同年に、パリ精神分析協会が設立されたことも想像させるだろう²⁰⁾。又、この点で、先に述べた＜後催眠暗示＞によって＜私＞が＜医者＞に＜治療医学史＞を書かせようともくろむとき、それを『脳髄』誌（＜l'Encéphale＞）に載せてはどうかと言っているのは注目に価する。何故なら、1913年にフロイトの精神分析理論の概要がフランスではじめてレジスとエスナールの連名で載ったのは、他ならぬこの『脳髄』誌なのである²¹⁾。しかも、＜私＞はその治療医学史が対象とする時代を、せめて19世紀から20世紀にかけてのものでよいと、わざわざ限定しているのである。エレンベルガーが第一次力動精神医学（1775－1900）と呼んでいるものは、磁気術師と催眠術師が集めた観察結果をより整合的な理論体系へと縛りあげる過程であり、メスメル、ピュイゼギュールから出発してシャルコー、ベルネームを経てジャネ、フロイトの新しい力動精神医学へと行き着くのである²²⁾。つまり、催眠暗示からブロイアーのカタルシス法および精神分析の最も重要な方法である自由連想法への移行が、もし実現していれば、当然、＜医者＞によって書かれる筈であったのだ。ところで、この＜医者＞に対する暗示に関して、何気なく言われている＜医者＞の2つの言葉を取りあげてみたい。

＜[...] Voyez-moi cette grosse fumée là-bas qui [...]＞(p. 75)

＜[...] Voyez-moi ce ciel... C'est admirable. Pas un nuage.＞(p. 169)

ラテン語の利害の3格に相当する言い方は、作者ヴァレリーのよく用いるものであり、日常表現においても似たような使い方があるだけに、そういうことで注目するに当たらないかもしれない。しかし、＜医者＞の言葉のうち、最初のはその直前に無意識のことが話題となっている。ロビンソンは、対話が織りなす話題の変転とその背後にある固定観念の存在との二重性が、対話の場所

である、〈海岸での牧歌的な夏の日〉と〈私〉の沈鬱な内面との間のコントラストによって象徴化されていると言っている²³⁾。このことを考え合わせるなら、〈医者〉は単に風景に言及しているのではなく、あたかも、自分の眼をしっかりと見据えさせて催眠をかけ、暗示を通して〈私〉に何かを語らせようとしているかのようである。先の2つの言葉よりも前に、〈医者〉は、〈Regardez-moi bien!〉(p. 58)とさえ言っていた。従って、〈私〉と〈医者〉の対話は、互いに催眠暗示をかけようと戯れながらその瀬戸際で繰り広げられる攻防と言ってさしつかえあるまい。〈私〉はそのことを自覚して〈nous nous livrons au combat des magiciens!〉(p. 126)と断言するのをもっともなのである²⁴⁾。このような催眠暗示をめぐる〈魔術師の戦い〉としての対話のフォルムを最も特徴づけているのが、すでに述べたように、話頭の転じによる話題の多岐性である。この多岐性自体、ある交換の一コマによって見誤まる恐れがないくらい明示されている。

M : 〈Attendez. Maintenant je vous prends à partie. En personne. Autre idée.〉

D : 〈Gare dessous! ...〉(p. 111)

〈Autre idée〉とは、明らかに、観念連合あるいは連想と呼ばれているものである²⁵⁾。それに対する〈下に注意!〉は、すでに言ったように、〈subconscient〉の〈sub〉であるから、〈subconscient〉に連想の際には注意しなさいと警告を発しているのである²⁶⁾。ということは、患者と精神科医をそれぞれ自分の役割として引きうける〈私〉と〈医者〉の対話が、対話本来の性格からだけでなく、意図的に自由連想の場であるということ、要するに、フロイトの自由連想法のパロディーとすることに等しい²⁷⁾。なぜなら、〈医者〉は、連想の瞬間において、気をつけないと、これまであなたが私の誘いにもかかわらず、固定観念を白日の下にあばき出すことを拒否してきた〈抵抗〉の努力が水泡に帰してしまいますよと忠告しているからである。このように、一方からみれば、〈私〉に対する知人としての労りとも受けとれ、他方からすれば当の労りそのものが〈私〉との関係外で、すなわち、『固定観念』の読者との関係で、フロイトの自由連想に対するパロディーとも受けとれる〈医者〉の姿勢は、その自由連想によって語られるもの、〈私〉の思い出に対しても見ることができる。

D : 〈Quant au passé, je vous en tiens quitte,〉(p. 41)

だが、その過去、〈思い出〉に関しては、〈医者〉は感情的絆にほだされているかに見えるような姿勢を常に取りっているわけでもない。自由連想の対話中の白眉と言ってよいのが、〈私〉の語るアインシュタインの〈思い出〉である。

〈私〉はアインシュタインの講演を聴きに行った際、非常に感銘を受けたと言って、物理学者

の次のような言葉を<医者>に伝える。

<La distance, a-t-il dit, entre la théorie et l'expérience est telle, — qu'il faut bien trouver des points de vue d'architecture.>(p. 154)

注意したいのは<expérience>という語である。話題が物理学に関することである以上、この語の意味を、まず、<実験>と解すべきであるのは言うまでもない。事実、『固定観念』の英訳者ディヴィッド・ポールは、わざわざ、<its experimental proof>²⁸⁾と訳している。しかし、問題なのはこの後の二人の交換である。<医者>は<私>から教えてもらったアインシュタインの言葉を表面的には、どう理解しているのかわからないため、解説を頼むが、その解説を聞いてもしくりこない（かに見える）ので、アインシュタインの理論構築について次のように言う。

<[...] mais si ce gros travail n'est pas vérifiable, mais si l'expérience, un beau jour, le dément? [...]>(p. 156)

<vérifiable>は<expérience>に対して端的に呼応するが、<démentir>となると、後者に対してそのような直接的な呼応関係以上のものがある。むしろ、精神医学における<dément>を想起すべきだろう……。上に引用した言葉を<私>が全く中性的に解し（あるいは、そういう振りをし）て物理学における仮設の重要性を強調すると、<医者>は自分もその一翼を荷う<生命科学>では物理学のようなわけにはいかないと言って、話頭を転じる。ここから、話題は<生命>へと表面的には移る。その際、<医者>は<生命>のことをまさしく精神医学の<dément>を使って、<une démente> (p. 157) (さらには、<la folle> (p. 158)) という風にひとりの女性に見立てる。ここに来て、先の<医者>の言葉を<私>のように単に物理学上の意味として解してそれで済ますことはできない。<démentir>はもはや、<contredire>、<nier>のような中性的語の代理ではなくなる。とすると、<expérience>も当然その意味を変質させることになりはしないか。<私>は<医者>の<la folle>という擬人化にわが意を得たかのように、<C'est vraiment une folle> (p. 158) と言って無邪気に和してい（るかに見え）る。そして、次のような罵倒の言葉を浴びせる。

<Il faut avouer que cette fichue vie ne cadre pas du tout avec tout ce que nous savons et pouvons penser... Rien de plus bête, de plus subtil, de plus étourdi, de plus obstiné... [...] .>(p. 159)

それに対する<医者>の返答――

<Croyez-vous qu'un homme du genre de votre Einstein se tirerait de cette affaire-là?>

あなたのおっしゃるアインシュタインのような人間なら、この<気狂い女>の、理性や意志の抑制などこれ見よがしに打破ってしまう擾乱をものに見事に切り抜けられるのでしょうか……。無論、アイロニーである。これは、<expérience>の意味を、<私>の理解した通りに<実験>と一応取った振りを見せながら、<生命>——そこには、無論、<人生>という意味も含まれていた——の話に転じることによって、<私>を、もはや実験室での<経験>の場ではなく、実人生の<経験>の場に、すなわち、<私>を苦しめている張本人である固定観念という深さへと意図的に誘い込んだかのような<医者>の迫り様である。<expérience>の意味が話頭の変転を通して<実験>から<体験>へとずれていく仕組みは、テキストの織物のうちに編み込まれているように思われる。<私>がアインシュタインの言葉をそのまま引用する直前に、その当の言葉について次のように言う。

<[...] ce propos qui m'a ravi, vous l'avez dit —— ravi au sens le plus fort de ce terme, au sens... aquiléen, ou aquilin! >(p. 154)

引用文にあるように、<ravir>という言葉をもとに言ったのは<医者>の方であり、しかも、一義的に<うっとりさせる>という意味においてである (p. 153)。この言葉を受けた<私>は、相対性理論の創始者から発せられた文句を聞いたときの感動が[・]ありありと[・]甦[・]ってきたのか、<ravir>のもうひとつの意味、<(人)をさらう>という意味を[・]機知に[・]富んだ[・]言い方——<aquiléen>,<aquilin>——で付加しているのである。<私>による<ravir>という語の意味の二重化とその二重化に伴う過去の興奮の甦り！<私>のこの興奮は、<気狂い女>=生命について、<Docteur, il faut aviser au plus tôt...> (p. 159) (<先生、もうすぐにでも気狂い女を精神病院に通報しなくては行けませんね……>)²⁹⁾という軽口にまで及ぶ。<医者>は、このような二重化と高揚感を職業柄、冷静沈着に観察し、今度は自分の方から<expérience>に関して二重化を実演してみせるのである。それが、<私>の手放しの高揚感に冷水を浴びせかけ、<私>に匕首を突きつけるものであったことは、<あなたのおっしゃるアインシュタインのような人間なら云々>の言葉に対して、<Veuillez prendre la peine de vous asseoir...> (p. 159) と応じたことで火を見るより明らかだろう。露骨なまでの、そして、不様なまでの話頭の転じ方である。<私>のうろたえ振りは、<医者>にこのように迫られるまで、相対論の著者の言葉が自分を強く感動させたというまさにそのことによって、実は、他でもない、固定観念に悩まされている自分自身

の心的外傷体験、対話の表面の奥にたゆたっている自身の性愛体験（生命＝気狂い女の擬人化はこの意味で示唆的である）に直結しているということをはっきりと＜私＞が自覚していなかったことを意味する。機知を駆使して＜医者＞の間診に応じている、つまり、＜抵抗＞しているかに見えながら、その実、無意識の跳梁に知らず知らずのうちに身を任せているのである。以上のような自由連想の場において、フロイトのこの方法を構成する本質的な特徴を指摘することができる。まず、＜raver＞の意味の二重化は、患者が精神分析治療の場において心的外傷体験を思い出として語る際に、過去の感情的衝撃を再現する＜徐反応＞を言語化したものである。確かに、＜私＞が思い出として語るのは、その種の不快な外傷体験とは逆に、快の感情的体験である。しかし、＜私＞は、ある思い出が＜ちょうどいい潮時に浮かんできた＞（p. 144）と言っておきながら、実際にアインシュタインの思い出をしゃべる前に、テキストでは5ページにわたって対話が続けられている。これは、＜私＞の警戒を、言い換えれば、蘇った思い出にすぐ飛びついて語ろうとはしない＜抵抗＞を表わしている。抵抗は対話全体を通じての＜私＞の基本姿勢であった。しかも、＜私＞がやっとアインシュタインの講演の模様を語り出す際、二人はどのような交換をするか――

M : <Je vous l'offre. Il est beau, et il a quelque rapport avec ce que nous disons.>

D : <Et si d'ailleurs il n'en a aucun, nous y pourvoirons.> (p. 149)

＜わたしたちが言っていることとその思い出はなにか関係があります＞と言っているのは、テキストの表面上の文脈からすれば、健常者と精神異常者との間の距離は見かけ程かけ離れていない（p. 141）という＜私＞の見解に対して、＜医者＞から＜詩人＞とか＜芸術家＞の場合はその点でどうなるのか³⁰⁾と問われて（p. 143）、それに答える形になっている。事実、そうして思い出が語られる過程でアインシュタインは一流の芸術家であるという結論に至ってさえもいる（p. 155）。だが、＜それに、関係がなければ、わたしたちの方で関係をつけてやればよい＞という＜医者＞の言葉にあるように、しかしながら、表面上の関係ではなく対話の底を流れる深層のモチーフを、＜わたしたち＞ではなく、＜医者＞その人が＜私＞に突いて見せたことは、すでに分析した通りである。患者が語る思い出の、無意識との連関と、その連関を通しての意味が、患者自身に理解されていなかったわけである。そうすると、＜抵抗＞、＜徐反応＞、＜無意識＞が確認されたが、シュルトークとド・ソシュールによれば、フロイトの功績である、医者と患者との情動的交流としての＜転移＞と＜逆転移＞³¹⁾はどうか。それは、あたかも、＜私＞と＜医者＞が知人という間柄によって感情的絆に結ばれつつ、一方は話頭を転じることで、あるいは、概念規定を明確にしたリ抽象化をしたりすることで、様々な抵抗を試み（cf. p. 171 と 174）、他方は相手を労りつつも、窮地に追い込むといった具合に、両者の共犯関係を強く感じさせる設定³²⁾において表現されてい

るかのようだ。従って、アインシュタインの思い出の場面は、＜私＞がフロイトとその患者の場合とは逆に快適な体験を語ることによって、まさに、自由連想法のパロディーだと言わねばならない。これまでは、『固定観念』の対話部をフロイトとの関係において分析してきた。次に、＜召喚＞・＜引用＞の二重の意味において＜citer＞すべき人物がもうひとりいる。作者ヴァレリーともウィーンの分析医とも因縁を持つアンドレ・ブルトンである。要するに、ブルトンのあるテキストを重ね合わせて見た場合の『固定観念』の何がそのフォルムにおいて析出してくるか、そういう読み方が問題なのだ。

II ヴァレリー対ブルトン

まず、ひとつの固有名詞から出発しよう。＜私＞が自分固有な問題意識——これは、作者ヴァレリーのそれである——から、＜生体＞を全体的観点に立って＜表象＞（＜représentation＞）する、つまり、生体の機能をどのように総合的に把えるかという試み³³⁾が生理学によってなされてしるべきであるにもかかわらず、そういう試みがいまだなされていないと不満を述べ（pp. 109–110）、これに関連して＜既知の反射運動（réflexes）³⁴⁾についての組織的な一覧表＞というものが作成されているのかどうか、神経学者に何度も尋ねたことがあると言うと、＜医者＞は私もそういう一覧表は知らないと答えるが、はっと思い出したのか、フォア（Foix）、フロマン（Froment）とともに、ババンスキー（Babinski）³⁵⁾の仕事を挙げる。ところで、マルグリット・ボネによれば、ブルトンは、1916年7月下旬にサン・ディズィエ神経・精神医学センターへ配属（同年11月末まで）された後、1917年1月末にパリのラ・ピティエ神経学センターの通勤助手として、ババンスキーの下に籍を置いている³⁶⁾。1916年という年は、第一次大戦の世情不安も手伝って、青年ブルトンにとって内的危機の年であり、彼にサン・ディズィエ神経・精神医学センターへの配属を希望させた動機は、この頃彼がフレンケル、アポリネールと共に、ヴァレリーにあてた手紙から推測できると、ボネは言う³⁷⁾。この当時のブルトンにとってヴァレリーは目上の腹心の友であったことが十分に推察される³⁸⁾。そういう重要な意味をもつ1916年の秋にヴァレリーにあてた手紙の中で、ブルトンは、＜シャルコー、フロイト、クレペリオンに夢中になっている＞と書いている³⁹⁾。そのフロイトをブルトンが発見したのは、サン・ディズィエ滞在の初期に、レジスの『精神医学概論』（＜Précis de psychiatrie＞）と、同じくレジスがエスナールと共著の形で1914年に出版した『神経症と精神病の精神分析』（＜La Psychoanalyse des névroses et des psychoses＞）とを通してである⁴⁰⁾。ところで、この後者の著作はその前年の1913年に、『フロイトとその学派の学説』（＜La Doctrinaire de Freud et de son école＞）という題でレジスとエスナールが発表した論文をさらに展開させたもの⁴¹⁾であるが、その論文が載ったのは、すでに述べたように、例の『脳

髓』誌であった。ヴァレリーがどのような直接的な契機から、いつごろ、フロイトを知るようになったか、詳らかではないが、レジスとエスナールの2つの著作は、フロイトの精神分析理論をまとめた形ではじめてフランスに紹介した事実⁴²⁾を考え合わせるなら、ブルトンがヴァレリーにフロイト理論を最初に教えたとはまでは言わないにしても、少なくとも、フロイトにより一層の興味をかき立てた一人である公算が大きい⁴³⁾。いずれにしても、ヴァレリーがこの時期にブルトンを通してフロイトについてのなんらかの情報を得たであろうことは、レジスとエスナールの単行本がアンリ・エーによれば、「世界大戦の蔭にかくれてしま」い⁴⁴⁾、一部の専門家にしか注目されなかっただけに、特筆に価する。『固定観念』に戻るなら、<私>はアインシュタインの思い出を回想する上でその伏線ともなる、健常者と精神異常者との意外な親近性を強調した後、その親近性を痛感することになった経緯に、精神病院の訪問のことを挙げ、それは、<30年ばかり前になる> (p. 141) と言う。年代は概算のためほかされているが、『固定観念』が書かれた1931年を基点にして計算すれば37年前、すなわち、1894年にヴァレリーは実際モンペリエの精神病院を訪れたことをジイドあての手紙でちらと述べている。⁴⁵⁾アンリ・パストゥローが1916年の恐らく8月と推定して引用したブルトンあての未公開書簡の中で、ヴァレリーは<22年前>とはっきり年代を限定してそのときの見聞を披露している⁴⁶⁾。つまり、1894年の出来事のことである⁴⁷⁾。健常者と精神異常者との境界の不明瞭さについては、ブルトンは『ナジャ』において次のような言葉で述べている。

<L'absence bien connue de frontière entre la *non-folie* et la folie ne me dispose pas à accorder une valeur différente aux perceptions et aux idées qui sont le fait de l'une ou de l'autre.>⁴⁸⁾

<私>が固定観念という精神医学用語の不正確さを批判して、観念というものは本性上、固定できないからです (p. 26) と、自説に固執すると、<医者>は<私>の意地地な態度にあおられて現実の患者をではどうするのかと<私>に問い詰めるが、ふと話頭を転じる。

<[...] Mais les rues, (et même les rochers), sont pleines d'*idées fixes*...> (p. 27)⁴⁹⁾

それに対し、<私>は<idées fixes>に、<*Frustes et ambulatoires ! ...*> (p. 27) を付ける。<Frustes>は<医者>の文句の中の<rochers>にも関係する機知であるが、注目したいのは、むしろ、<ambulatoires>の方である。都市生活の中での群集の欲望についての陳腐な科白と速断しないで、たとえば、ブルトンの『失われた足跡』の中の「侮蔑的告白」にある次の文章を思い浮かべてはどうだろうか……。

「La rue, que je croyais capable de livrer à ma vie ses surprenants détours, la rue avec ses inquiétudes et ses regards, était mon véritable élément : j'y prenais comme nulle part le vent de l'éventuel.」⁵⁰⁾

あるいは、『ナジャ』の一節。

「J'espère, en tout cas, que la présentation d'une douzaine d'observations de cet ordre et de celle qui va suivre sera de nature à précipiter quelques hommes dans la rue, après leur avoir fait prendre conscience, sinon du néant, du moins de la grave insuffisance de tout calcul soi-disant rigoureux sur eux-mêmes, [...]」(pp. 68-73)

これらの文章で言われていることは、フロイトの無意識概念に触発されたブルトンが「客観的偶然」⁵¹⁾と呼ぶものであり、偶然の出会いを通して理性の呪縛から脱し無意識を解放するシュールレアリスム的方法を意味することはよく知られている。そういう方法の実践の場としての「rue」が「*idées fixes...ambulatoires*」に満ちていると言うのは、このようなブルトンの問題意識をあてこするものではあるまいか。「医者」は「私」の言葉を受けて、「Ne vous moquez pas de moi. [...]」(p. 27)と反応する。これは意表をつく「私」の表現に対するものと一応は考えられるが、しかし、固定観念についての交換において、「それにしても」と、突拍子もなく世相に触れたのは「医者」の方なのだ。「私」と「医者」との間にある共犯関係を見る思いである。「医者」は、ブルトンのことはどうでもいいですよ、と言っているかのようだ。だが、からかっているばかりではない。ヴァレリーが「錯綜体」(「*implexe*」)と呼ばれる概念を初めて提示したのは、『固定観念』においてであるが、この概念について「私」は、「Notre capacité de sentir, de réagir, de faire, de comprendre」(p. 87)と言い、次のように定義する。

「[...] , j'entends par l'*Implexe*, ce en quoi et par quoi nous sommes éventuels... Nous, en gros; et Nous, en détail...」(p. 91)

この概念と先程のブルトンの「客観的偶然」に関する引用文とを比較してみると示唆的である。「錯綜体」という概念が『固定観念』においてはじめて提示されたからと言って、ヴァレリーがブルトンに直接影響されたと主張するつもりは毛頭ない。そのような影響関係よりも、後者に対する前者の対抗意識である。「錯綜体」と名付けられる考え方は、ヴァレリーにとって、ブルトンと親交を結ぶようになったはるか以前に、少なくとも萌芽の形で存在していた。ド・ロヴ

イラ事件⁵²⁾は、不意打ちの出会いを通して自己による自己の疎外、＜大雑把に言っても＞、＜詳細に言っても＞、私の体験と言わざるを得ない根源的な体験であったからである。ブルトンの＜客観的偶然＞が無意識の存在を前提とし、それを通して無意識の解放を志向しているのに対して、ヴァレリーの＜錯綜体＞は、作者の分身である＜私＞が＜医者＞の見解を否定しているように、無意識でも下意識でもない(p. 87)⁵³⁾。同じ現象を捉えてこのように、その前提が真向うから対立する二人の歩みは、その接点と分岐において確認しておくだけの価値がある。だが、先回りはしないことにしよう。

知性のことを話題にしている途中で、＜医者＞が皮肉まじりに現代風俗に言い及ぶと、話題は一坦、風俗に移る。そうして、＜私＞が＜でも、私は知性の話をしていたのでしたね＞と思い出し、知性の一般的問題に話題は帰ってゆくかと思うと、＜医者＞は、もう一度、知性について世相に言及する。

＜[...] Mais, mon cher, on n'a jamais élucubré de conceptions plus ahurissantes.＞(p. 134)

＜私＞は何のことかわからないため、＜Où cela?＞と尋ねると、次のような答が返ってくる。

D : ＜Mais, partout... En Littérature, d'abord, — comme il sied...＞(p. 134)

そして、＜私＞の付言——＜Et en Peinture, donc...＞(p. 135)。これらは、シュールレアリスム文学と絵画へのあてこすりを想像させる。ヴァレリーが＜医者＞に＜élucubrer＞という語を言わせているのに注意した方がよい。1962年の『ナジャ』の全面改訂の際に削除されることになったツァラとの衝突事件について⁵⁴⁾、ブルトンはツァラの詩集＜25 Poèmes＞を＜25 Elucubrations de Policier＞と皮肉っている(p. 21)。あたかも、ブルトンのツァラ攻撃をそっくりそのまま、ヴァレリーがブルトンに返しているかのようである。テキストではそれに続いて、＜医者＞が＜私＞も文学界に身を置く一人であることを思い出したのか、＜Excusez-moi de vous dire tout ceci. Vous êtes de la partie. [...]＞(p. 135)と、わびを入れる。それよりも、＜医者＞の言葉の中で、＜文学＞が大文字になっていたこと、＜医者＞のモデル、ルイ・ブールがヴァレリーの友人であり、ヴァレリーが一時、ブルトン等の創刊した雑誌『文学』にその題名を提案し寄稿していたことを考え合わせるなら、単に文学界の一人でしたねと＜医者＞が想起こした以上に、かつては、あなたもブルトンの活動に手を貸したこともあったのでしたねとでも言いたいような口振りである。＜私＞はこの＜医者＞の陳謝に、あなたが反対の意見を述べていたら衝撃を受けていたでしょうが、遠慮なさらないで下さい、侮辱したことにはなりませんからと言って、次の

<Autre chose> あるいは <ex(-)pliquer>

ように続ける。

<[...] Mais observez : plus on... abracadabre, comme vous dites, — et plus l'automatisme domine, plus il est visible, exigeant, immédiat.>(p. 135)

<私>が何のことを言っているかは明らかだろう。<écriture automatique>の実践を通して無意識を探り、全く未知なるある自己との出会いを希求するブルトンの方法も、それ自体のうちに、無意識の探求どころか、惰性と化すことによって日常の意識状態と同じ局面を露呈するにとどまる陥穽を孕んでいると、批判しているのである。これに力づけられたのか、<医者>は<Graphocoque> (書字狂病原菌) という造語までして暗にシュールレアリスト達を茶化している。ナジャの「物語の余白に」(pp. 21-2) 様々な出会いを語り出すとき、話者は、<努力しないで>、<前もって順序立てることなどせず、そのときそのときの気まぐれに従って記憶の表面に自然に浮かび上がってくる> (p. 25) 仕方で語ろうとする。これは、フロイトの自由連想法を踏まえていることに他ならない。『固定観念』がこの精神分析学的方法をもじったものであることはすでに述べた。『ナジャ』の<私>は<双面劇場>で見た『気のふれた女たち』という芝居の衝撃的な印象に誘発されて奇怪な夢を見るが、その夢についての件で、<surdéterminant> (p. 62) という語を使っている。ところで、『固定観念』では、この精神分析学用語を念頭に入れたヴァレリーの造語を指摘することができる。<私>の言う<omnivalent(ce)> (全価可能的 (性))⁵⁵⁾ というのがそれである。

<[...] cette idée... obsédante, — et non fixe, [...] Est *omnivalente*... S'accroche à tout... Ou : est accrochée par tout...>(pp. 43-4)

<医者>はこれを聞いて、<omnivalent>という新語を自分にくれたら、それを題名にを使って、フロイト理論の移入で由緒のある『脳髄』誌に論文を載せますよと答える (p. 44)。<錯綜体>の場合と同様に、既成の用語と概念に今度は造語でもって対抗するわけである。<全価可能性>にせよ、<錯綜体>にせよ、『固定観念』の中ではじめて表明されたのであるが、再版につけた序文でヴァレリーは次のように言う。

<[...] et l'on ne se flatte pas que l'*Implexe* ni l'*Omnivalence* soient pris pour autre chose que des amusements sans conséquence. Il est vrai que la plupart des notions dont on use en Psychologie ne sont, en vérité, pas beaucoup plus commodes, ni plus précises que celles-ci.>(p. 8)

注意を喚起したいのは、このようなヴァレリーの口吻である。修辞学で言う迂言法を使ったというまさにそのことが、作者の底意を予想させる。いずれの概念も自由連想のパロディという対話部のフォルムを背景にして考えれば、そこに、『ナジャ』⁵⁶⁾を意識したヴァレリーの姿勢がうかがえるようだ。アインシュタインの思い出に立ち帰ろう。すでに言ったように、＜医者＞は生命を＜une démente＞と擬人化し、＜私＞も＜une folle＞と形容する。その文脈の中で、次のような交換が行われる。

D : ＜[...] La vie est paranoïaque!... Sans le moindre doute.＞

M : ＜Docteur, il faut aviser au plus tôt...＞

D : ＜La loi de 1838 est parfaitement applicable.＞(p. 159)

常規を逸した衝動によって主体の人格を破産しかねない生命の、というか、気狂い女の無秩序に対しては、フランスの精神医学史上大きな意味を持つ1838年法を適用して精神病院に入院させればよいという二人のやり取りは、これに『ナジャ』を対応させてみると、単なる無邪気なおしゃべりとは思えなくなる。ナジャが措置入院させられたのは、この1838年法の適用によってだからである⁵⁷⁾。あまりに有名な、＜Nadja＞——＜le commencement du mot espérance＞(p. 84)。ところが、『固定観念』の＜私＞は何を思ったか、言葉こそ違え、この「希望」という言葉をくり返す。

M : ＜Oui. Mais je parle des espoirs. [...]＞⁵⁸⁾

D : ＜L'espoir est fait pour varier.＞

M : ＜L'espoir...＞

D : ＜Feu!... Descendez-moi ça.＞

M : ＜L'espoir, l'espoir...＞

D : ＜*Il est vrai nous soulage...*＞(p. 107)

＜私＞が惚けたように＜espoir＞をくり返す、このテキストの微妙な口調！この場面には、いくつかの事情が折り重なるようにからみ合っている。1) アインシュタインの思い出がそうであったように、ここも、＜医者＞が遠回しに固定観念の原因を聞き出そうとする試みに対して、＜私＞が話頭を転じて⁵⁹⁾抵抗したために、このような対話の調子からはずれる応答がされていること。2) この後の対話が結局、＜反射運動＞に関する生理学の研究を経てババンスキーの指名に至っていること。3) ＜*Il est vrai nous soulage...*＞という文句は、実は、モリエールの『人間嫌い』

＜Autre chose＞あるいは＜ex(-)pliquer＞

の中で、女性から希望を与えられたオロントが作った詩の第一行にあり、彼がこの詩を読み始める前に、希望という後を何度かくり返していること⁶⁰⁾。以上から見て、ヴァレリーがわざわざ別の作品から引用までしてみせ、しかもその部分を強調して挿入していることは、ブルトンへの、そして、『ナジャ』への参照をほのめかすものだろう。又、改めて＜生命＞＝＜une démente＞の擬人化の場所に戻るなら、それはこうなっている。

D : <En voilà une démente... [...] ... Elle est maniaque; [...] délirante... jusqu'à inventer les insectes... Grossissez la mouche...>

M : <Quel cauchemar!... Et l'Homme, donc!...>(p. 157)

ここの＜l'Homme＞は、＜昆虫＞、あるいは、＜ハエ＞との対照を通して言われているから、一義的に、＜人間というもの＞という意味であることは言うまでもない。しかし、＜医者＞はすぐ後に＜Et la Femme, donc!...> (p. 158) と応じている。生命が＜痴呆の女＞に見立てられ、＜女性ですよ＞と言明されているのであってみれば、先の＜l'Homme＞も当然「男性」という意味に変質する⁶¹⁾。意味の屈折！狂気に襲われたナジャとブルトン！ブルトンは『ナジャ』において夜中に森で裸の美しい女に出会うという抗しがたい欲望について語るところで、そういう不意の出会いを次のような形で賛美する。

<J'adore cette situation qui est, entre toutes, celle où il est probable que j'eusse le plus manqué de *présence d'esprit*. Je n'aurais même pas eu, je crois, celle de fuir. (Ceux qui rient de cette dernière phrase sont des porcs.)>(p. 47)

ヴァレリーはこの「機転」について『固定観念』の中で次のように定義する。

M : <[...] Je crois que la présence d'esprit consiste... à émettre une solution, qui suppose la réflexion, au bout d'un temps beaucoup plus court que celui d'une réflexion...>(p. 69)

至極もっともな定義である。だが、＜réflexion＞に関する言葉遊びは、『ナジャ』において＜客観的偶然＞を通してのブルトン自身の生活について言及される際に使われている＜réflexes＞ (p. 22) を思い出させ、また一方で、『固定観念』において、他の動物は人間と違って無駄なこと、すなわち、生命維持には不必要な価値づけはしないとあって、＜私＞が＜vache＞の例をあげ、この動物は星を見てもそこからカントのように道徳律など考えつきはしないと冗談をとばしているところに送り返す (p. 78)。まさしく、＜vache＞の反射運動が問題なのだ。

＜[...] Si un objet nouveau l'effare, elle file, [...] . Elle ne définit cet objet que par la fuite : chose devant être fuie.＞(p. 78)

この話も、深層のレベルでは、＜vache＞とは違って、自分自身が体験の思い出に過剰な価値付けをしないではいられない、しかし、この過剰のために＜vache＞と同じように固定観念から逃走するにもかかわらず、＜vache＞と違って逃げるに逃げられない＜私＞の姿を陰画のように映し出すのであるが、ここにも対応関係を認めることができる。同じく＜逃走＞という＜反射運動＞を扱う『ナジャ』と『固定観念』において、ブルトンは、逃げるに逃げられない自分をあざ笑う者を＜porcs＞呼ばわりするのに対し、ヴァレリーは、逃げるに逃げられない自分を＜vache＞の例でカリカチュアし、そのことでブルトンも同類として引き入れる。無論、後者の言葉は、前者で語られる Jacques Vaché を連想させるだろう。ブルトンは第一詩集『慈悲の山』（1919年）に＜Monsieur V＞という詩篇を載せている。＜V氏＞とは、明らかに＜テスト氏＞の作者ヴァレリーのことである。その中に、＜MARCHE/Pierre ou Paul＞⁶²⁾という言葉がある。ボネによれば、この＜MARCHE＞はヴァレリーが1918年7月25日付のブルトンあての手紙で彼にソネットを所望し、作詩法上の注文を付けて＜Marche!＞（進め!）と書いていたのをブルトンが採用した言葉である⁶³⁾。ヴァレリーのファースト・ネームを付け加えて。この詩篇はヴァレリーとの＜間接的対話＞⁶⁴⁾を通して、＜意味を音によって強めたり純化したりする＞古典的な詩法を否定する、新たな詩法への変革がブルトンの内部で兆していたことを立証する性格を持っている⁶⁵⁾。ところで、＜私＞は潜勢態としての錯綜体を説明する際に、過去・現在・未来の時間概念との関係で動詞＜marcher＞を使っている。＜[...] Exemple simple. [...] Marcher.＞(p. 88)。＜医者＞は、いまさら子供ではあるまいに動詞の活用をさせられる破目になる。＜Je marche. Tu marches... J'ai peur que ce ne soit un <test>...＞(p. 88)。錯綜体がブルトンの客観的偶然という概念と競合する側面を持つものであることはすでに述べた。詩篇「V氏」のエピソードについても。そこにヴァレリーのなんらかの意図を想定することは許されるだろう。『固定観念』が書き終えられて間もない1932年1月のカイエでヴァレリーは、＜Dans l'Idée fixe — je met en blague l'idée du temps [...]＞(XV-462)と書いている。『固定観念』の＜私＞＝ヴァレリーは、自己の内部に巣食うこの＜parasite＞(p. 13)から逃れようとして＜error＞(p. 14)し、＜医者＞に＜le plus grand des hasards＞(p. 73)によって出会う。『ナジャ』の＜私＞＝ブルトンが＜医者＞によって＜固定観念に満ち満ちている＞と言われた通りをあてどなく歩いているときに、偶然ナジャに出会うように。そのナジャは＜l'âme errante＞(p. 92)であった。＜貧者、病者そしてときに娼婦でもある⁶⁶⁾＞ナジャと、かつて、精神医学の道を一度は志し、息子の無謀を知った父親からの依頼を受けてヴァレリーが医学の研究を続けるように説得したのもむなく、医学を断念した⁶⁷⁾ブルトンとは、正真正銘、患者と精神科医との関係を一面において結んでいた。

『固定観念』では、ヴァレリーと＜医者＞はある面で患者と精神科医の役割を弄んでいる。その患者としてのナジャが、精神科医としての＜私＞に悲痛な叫び声で言う、＜André? André?... Tu écriras un roman sur moi. Je t'assure. [...]＞(p. 135) この言葉に暗示されたかのように、ブルトンは『ナジャ』を書いた。すでに述べたように、『固定観念』では、患者の＜私＞は後催眠暗示、あるいは、暗示を使って、19世紀から20世紀にかけての治療医学史を書くように＜医者＞に推める。あたかも、フロイトの精神分析療法の章に、ブルトンとナジャのエピソードを挿入するようほのめかす言葉と解釈することも可能だろう。だが、固定観念に悩まされ＜医者＞にフロイトの意味における抵抗を見せる＜私＞＝ヴァレリーは自分を無条件に括弧に入れているわけではない。フロイトの＜多元規定＞に相当する＜全価可能性＞を題名に使う『脳髄』に発表してもいいと＜医者＞が言ったその論文に、特異な抵抗を見せる＜私＞も症例として載ることになる。それも、＜Edmond T＞の名で！この名前が、ブルトンを魅了してヴァレリーに接近させる契機となると同時に、絶交のモチーフともなる、あの「テスト氏」であることは明らかである。ブルトンは気づいていたのだろうか、かつて『慈悲の山』で詩篇を捧げられた＜Monsieur V＞が、周囲の＜革命の夢＞をよそに＜公現祭の王様選⁶⁸⁾び＞にもはや打興じるのではなく、＜トランプに描かれた王様^{キング}のように、この上なく重要な主題がテーブル・クロスの上に投げだされては、また手に取られ、世界とその瞬間とのさまざまな下らぬ事柄と混ぜ合わされた＞(p. 7) (強調は筆者) 『固定概念』を書いたということを……。『ナジャ』が＜Qui suis-je?＞(p. 7) で始まり、ナジャとの出会いの物語に関して、＜Est-ce moi seul? Est-ce moi-même?＞(p. 190) で終わることはよく知られている。『固定観念』は、その本体の対話部において、＜Tiens! Eh! Bonjour!＞——＜C'est moi-même... [...]＞(p. 19) という挨拶の文句で始まり、＜Je vous dis que je ne vous lâche pas... Un homme seul est toujours en mauvaise compagnie.＞(p.179) という＜医者＞の言葉で終わっている。＜医者＞の開口一番の挨拶に対する返事としては＜私＞の＜C'est moi-même...＞は不自然である。レジヌ・ピエトラは＜対話のこの奇妙な応答から出発して『固定観念』における＜私＞の地位に関する研究をすべきだろう＞と言っている⁶⁹⁾。＜私＞は、というか、テスト氏の仮面をつけたヴァレリーは、＜医者＞に応答している一方で、『ナジャ』のブルトンの問い——＜Qui suis-je?——Est-ce moi-même?——に作品外から同語反覆の返事でもって答えているかのようだ。ここで、ブルトンとヴァレリーの屈折に満ちた関係を指摘しておく必要がある。ブルトンは『第一シュールレアリスム宣言』(1924年)において次のように書いている。

＜[...] M. Paul Valéry proposait dernièrement de réunir en anthologie un aussi grand nombre que possible de débuts de romans, [...] ⁷⁰⁾

1929年ヴァレリーは『コメルス』誌の夏季20号に＜文学＞と題してアフォリズムを発表する。ブルトン達が創刊(1919年)した雑誌『文学』の名前の由来については、ヴァレリーの皮肉を混じえた提案による⁷¹⁾ことは周知の通りである。ブルトンはエリュアールと連名で＜詩についての覚書＞と題し、同年の12月15日の『シュールレアリスム革命』誌に、そのアフォリズムのいくつかをパロディーにして発表している⁷²⁾。ヴァレリーと＜医者＞の次のような交換は引用しておくだけの値打ちがある。ヴァレリーが「テスト氏」という名で『脳髓』誌の論文に載るといふ両者のやり取りに続く部分である。

D : <[...] Permettez-moi de constater qu'on se perd à chaque instant en votre aimable compagnie.>

M : <Pardon, nous sommes ici indivisibles. Dites que nous faisons indivisément de la confusion...>

D : <Parfait... *La confusion mentale seul ou à deux*... [...]>

M : <Eh bien, n'oubliez pas d'insister sur ceci : que la confusion mentale, — qui est plus ou moins pathologique *dans le seul*, — est normale quand on est *plusieurs*... [...]>

Mais, mon cher Docteur, on n'avancerait pas si on comprenait... J'irai plus loin : on ne se comprendrait pas soi-même si on comprenait les autres... Et on cesse de comprendre les autres si on se comprend tout à fait soi-même... C'est évident... Tenez, nous nous rencontrons sur ce bloc par *le plus grand des hasards*; nous causons... [...]>(p. 73)

ナタリー・サロートはヴァレリー批判の論文の中で『固定観念』について一言、＜les minauderies prétentieuses>⁷³⁾と呼んだが、この批判は的を射たかわりに、逆説的にも、その毒気を完全に失ってしまうだろう。取り返しのつかないナジャの悲劇、それも自ら我にもなくそれに手を貸してしまった悲劇をもう一度生きること、それは、＜Qui suis-je?>という問いと共にあり、その問いに書くことを通して、書く時点で自我の定立が予め拒否されている形で答えようとする、『ナジャ』におけるブルトンの根本的な問題意識を、ヴァレリーと＜医者＞との、ナジャとブルトンのカップルとは違って、和気あいあいの雰囲気の中で、つまり、＜indivisible＞な共犯関係の中で言われている自己と他者の理解についての文句に重ね合わせてみるとよい⁷⁴⁾。この文脈から読むとき、ヴァレリーが『固定観念』を書いている時期の次のカイエの文章は、俄然、その指示対象をくっきりと浮かびあがらせるのではないだろうか。

<Cet écrivain prétend être *connu* en tant qu'il s'ignore; Et *inconnu* en tant qu'il se connaît>(XV-368)

あるいは、それより少し前のページで〈écriture automatique〉について批判的考察を述べたすぐ下に書かれた記号！〈Aⁱ Bⁱ...〉(XV-340)⁷⁵⁾。あたかも、André Breton という人間を数学の記号に変じて、ヴァレリーの好きな言葉で言えば、〈opération〉しているかのようだ。だが、『固定観念』のフォルムを読み解く作業はこれで済んだわけではない。『ナジャ』と『固定観念』を重ね合わせるこの試みにおいて、何故、『固定観念』なのか、何故、小説ではなく、『ナジャ』の作品構成を転倒させた『固定観念』の対話部をヴァレリーが書いたのかという本質的な問題が残っている。それは、フォルマリスト＝ヴァレリーの意味を問うことに等しい。

III 結論

1932年2月28日と日付けの打たれたカイエの断章でヴァレリーは、〈Prélude de l'Idée fixe fait pleurer〉(XV-540; PL. C. II. p. 506) と、いささか自嘲気味に短い注釈を加えている。ロビンソンによれば、この断章は〈NR〉という略号でヴァレリーが分類し、カイエに記載した断章群に含まれる。同じくロビンソンによれば、〈NR〉は〈Néère〉の略式表現で、〈Néère〉とは〈Renée〉という女性名のアナグラムである⁷⁶⁾。この女性は、ヴァレリーが〈Mon buste〉と題したエッセーの中で論じている彫刻家 Renée Vautier である。〈J'étais en proie à de grands tourments [...]〉で始まる〈プレリュード〉は固定観念に責め苛まれている〈私〉の悪戦苦闘を悲愴なまでに描写しているだけに、〈NR〉という暗号の下に読むことができる先のカイエの断章は作品の読解をある方向に導くと言ってよい。『固定観念』の執筆時期は〈NR〉と呼ばれた女性との恋愛体験の時期と重なっている⁷⁷⁾。すでに述べたように、この作品は話頭の変転とそのような屈折の結果である話題の多岐性にと顕著な特色があるが、その実、このような表面的な対話の進行の間隙をぬうようにして、あるときは端的に、あるときはほのめかしの形で、固定観念の原因である性愛の主題が深さとしてわだかまっていることは諸家の指摘する通りである。メスメルからフロイトに至る力動精神医学史上の療法、とりわけ、催眠暗示と自由連想法をもじって戯れ合いながらも、〈医者〉は〈私〉の〈固定観念〉の原因を聞き出そうとし、〈私〉はそれに抵抗するのが対話の最も本質的なフォルムであった。このような観察から読者は一体何を聞き出すことが可能なのか？

『固定観念』に一見すると瑣末なとしか思われぬ言葉が書き込まれている。それは、〈私〉が『脳髄』誌のために書かれる〈医者〉の論文に自分が記載されるなら、「エドモン・T」という名で載ることになると言っている直後の言葉である。〈私〉はその「エドモン・T」に〈50才〉という年令を振りあてる。〈私〉が作者の分身であることを考慮に入れるなら、この算出は合

ない。それに、実年齢をそのまま作中人物に与えるといった芸のないことをヴァレリーがするとも思えない。ブルトンを夢中にさせた『テスト氏との一夜』に関連する年代と『固定観念』の執筆年代および出版年代とから計算しても<50>という数字は出て来ない。全く恣意的に選ばれた数であってもよいわけだ。ところが、『固定観念』を執筆している1931年のカイエで、ヴァレリーは当面の作品についての覚書の余白に次のような計算を記入している。

$\begin{array}{r} < 91, 2 \\ 20-28 \\ 31 \\ \hline 142 \quad 68 \end{array}$	
$\begin{array}{r} 39 \\ \hline 11 \end{array}$	> (XV-358; PL. C. II. p. 503)

数字<6>はロビンソンも指摘するようにヴァレリーの計算違いである。フロイトならこの失錯行為をどう解釈するだろうかと想像してみるのも一興かもしれない。ロビンソンも言うように、<91, 2>, <20-28>, <31>は、それぞれ、ド・ロヴィラ事件、ポジ事件、ヴォーティエ事件というヴァレリーの内的危機を表示する恋愛事件の年代である。下段の<39>は1931年から1892年を、<11>は1931年から1920年をそれぞれ引いた数字である⁷⁸⁾。足して<50>になる。しかも、<私>は精神年齢は何才と踏みますかと尋ねると、<医者>は<11才と3ヵ月>と答え、<私>もそれに同意する。<11才>とはヴォーティエ事件の1931年からポジ事件の1920年を引いた数字であった。では、<3ヵ月>の方は？恒川邦夫氏が指摘するように、ポジ事件の発端は1920年9月22日である⁷⁹⁾。『固定観念』の執筆時期が1931年の秋から冬と推定されていること⁸⁰⁾から、同年の暮を原稿締切り日と想定すれば、<3ヵ月>はそこから算出できる。つまり、ヴァレリーは原稿完成を見越していることになる。

恒川邦夫氏は、ヴァレリーの初期散文『ありそうな話』について、その「主人公の内的危機が」2年後のド・ロヴィラ事件という「ヴァレリーの危機をその主要な構図において正確に予告している」⁸¹⁾と言い、この初期作品と『固定観念』との共通性、歩きまわることによって固定観念をふり払おうとする試みを指摘している⁸²⁾。

＜Autre chose＞あるいは＜ex(-)pliquer＞

ヴァレリーは『固定観念』の中で＜医者＞に次のように言わせている。

＜[...] Si je m'observe, je trouve... qu'il y a des choses que l'on peut dire aux autres; et d'autres, qu'on ne peut dire qu'à soi-même... Et d'autres, qu'on ne peut même pas se dire à soi-même. [...]＞(p. 47)

3番目の事柄が無意識的心的過程を指すのは見やすいが、それはともかく、この文句と完全に一致するわけではないにしても、微妙に類似した文章が他にもない、ポジ事件の渦中に書かれたカイエにある⁸³⁾。

＜There are things I shall no more say to every else, and you will (can) no more say to any living soul. And it would be nothing if I said not (sic) them to myself.＞(IX-729)

この断章は、母国語ではなく英語で書かれているという事実によって、フロイトとプロイアーの『ヒステリー研究』において有名なアンナ・O嬢の症例を極限とするような強い感情的衝迫力の下にあるヴァレリーを想像させる。

『固定観念』が出版されてから5年後の1937年のカイエで、ヴァレリーは知合いの女流芸術家を訪ねて夕食を共にした際、彼女が精神分析を受けたことを話題にしたと述べている。そこでヴァレリーは、精神分析理論の中には評価すべき見解はあると認めつつも、「羊水的状態の思い出という観念」——幼児性欲とエディプス・コンプレックス概念を指すのだろう——に関する理論は受け容れがたいと批判した後、次のように書いている。

＜Je suis *fait pour* un autre genre d'analyse et d'auto-représentation du système Ψ . Je raconte à Hvj. comment je me suis délivré ou débarrassé avec luttes de mes démons 91, - 20-, 32- [...]＞(PL. C. II. p. 528)⁸⁴⁾

1931年から1年ずれて1932年になっているが、ここでも、3つの恋愛事件が列挙されている。注意しなくてはならないのは、精神分析の話題の中で3つの精神的危機が言及されているという一点である。ヴァレリーがこのように自分にとって重大な意味を持つ事件を直線的に並べていく思考形式は、N・R・ハンソンが「因果連鎖型」と呼んでいる⁸⁵⁾、因果律の典型的な考え方である。「羊水的状態の思い出」、言い換えれば、エディプス・コンプレックスの克服の成否に関わる幼児期の心的外傷体験が原因となって、1891年、1920年、1932年の事件が次々と鎖の輪のように生じたという風に、ヴァレリーは批判の対象であるフロイトと同じ観点から、因果律に基礎を置く。

決定論的思考⁸⁶⁾を行なっているのである。だが、他方で、＜Je suis fait pour un autre genre d'analyse...＞と表明しているように、ヴァレリーは因果論的決定論とは対立する合目的論的思考を行って⁸⁷⁾いる。今問題となっているカイエの断章においても、又、『固定観念』においても（p. 47, p. 64）、エディプス・コンプレックス概念を批判ないし揶揄していることは注目しておいてよい。すでに、＜錯綜体＞というヴァレリーの概念を＜客観的偶然＞というブルトンの概念に対置した。フロイトにおいて心的決定論の根拠となる無意識的過程がこのコンプレックス概念と表裏の関係をなすとき、ヴァレリーは＜私＞に＜錯綜体＞が無意識ではないと、＜医者＞の見解に血相を変えて反論させている。語を比較してみてもどうか。＜implete＞——＜complexe＞！⁸⁸⁾語の類似性自体がフロイトに対するヴァレリーの対抗意識を物語っている。前者が潜勢態として考えられているとき、無意識と誤解されかねないこの概念の定義にはヴァレリーの内的要請が働いている。清水徹氏が指摘するように⁸⁹⁾、＜錯綜体＞は一方で、そのときどきの機会をとらえ、機会にとらえられる主体の現実態を射程に入れた概念であり、他方で、そういう現実態の一回生起性自体が潜勢態としての錯綜体から見れば特殊な場合にすぎないという論理⁹⁰⁾を内包する概念であって、この論理の極限に位置するのがヴァレリーにとって自由論の根拠となる⁹¹⁾＜純粹自我＞概念に他ならないからである。ということは、＜錯綜体＞概念がフロイトの無意識概念、および、エディプス・コンプレックス概念をこのような概念装置の中にかめ取り、それによって、当の因果論的決定論を突き崩す戦略を確認することに等しい。フロイトの夢解釈、特に、因果論的決定論を前提とした夢の意味論的説明に対して見せるヴァレリーの拒否は、自分が個人史の上で3つの事件をめぐる正にフロイト流の因果論的思考をせざるを得ないということ、そして、そのような自身の思考形式に対して作用・反作用の法則よろしく反発することから来ている。では、『固定観念』においてヴァレリー＝＜私＞が「テスト氏」の名を借り、その上、3つの恋愛体験に結びついた年令操作までして登場しているのをどう解釈すべきか？それも、『ナジャ』のブルトンにおける、＜Qui suis-je?＞の問いかけに始まる「私の二面性」⁹²⁾に呼応するように、固定観念に深さにおいて憑きまわれ、それを表面に浮かびあがらせまいとして、それにもかかわらずと言うよりも、そうであるからこそ、失錯行為を重ねることにより、深さを垣間見させてしまう『固定観念』のヴァレリーの二面性、従って、対話部のフォルムそのものであるこの二面性において、ようやく、ブルトンとヴァレリーをある同一の視点に立って論じるべき時が来たようである。

ブルトンは『ナジャ』の冒頭で、ナジャの物語の前史とも言うべき、＜客観的偶然＞による様々な出会いをフロイトの自由連想を踏まえて語る前に、目下の精神状態をめぐる予備的考察を行なっている。それは周知のように、＜Qui suis-je?＞の二重の意味において、他者（人）との関係から、そして他者としての＜私＞との関係から、＜私＞が＜私＞を問い＝追いかけるという構造を持っている。このような＜二面性＞はブルトン＝＜私＞にとって「永久に続くかもしれない責苦の申し分のないイメージ」に他ならない。ブルトンはこのイメージを受けて次のよう

に書く。

＜Il se peut que ma vie ne soit qu'une image de ce genre, et que je sois condamné à revenir sur mes pas tout en croyant que j'explore, à essayer de connaître ce que je devrais fort bien reconnaître, à apprendre une faible partie de ce que j'ai oublié.＞(p. 8)

ブルトンが何を言おうとしているのかは明らかだろう。過去が現在にそれこそ幽霊のように憑きまとい、現在は従って過去によって決定されているのではないかという疑念である。これは、ヴァレリーが一方で行っている、1891（2）年、1920年、1931（2）年という具合に、過去と現在を直線的に並べる因果論的決定論そのものである。しかも、ブルトンがフロイトの自由連想法を採用して思い出を語ろうとする際に、精神分析理論を自分に対して濫用しないようにと、予め精神分析に制限をつけていることは注目に値する。そこには、この理論の持つ因果論的決定論の性格に対するブルトン自身の警戒を見てとることができる。このような意味で、ヴァレリーとブルトンは共通性を持っていると言わねばならない。ブルトンは続けて言う、

＜Cette vue sur moi-même ne me paraît fausse qu'elle me présuppose à moi-même, qu'elle situe arbitrairement sur un plan d'antériorité une figure achevée de ma pensée qui n'a aucune raison de composer avec le temps, qu'elle implique dans ce même temps une idée de perte irréparable [...] dont le manque de fondement moral ne saurait, à mon sens, souffrir aucune discussion.＞(p. 9)

これは、ブルトンの因果論的決定論を超克する意志をはっきりと表している。＜Je suis fait pour un autre genre d'analyse [...] du système Ψ ＞と言ったヴァレリーと違ってブルトンは露骨に因果論的決定論に対立する合目的論を楯にとっているのではない。彼はナジャの物語に注として、＜合目的論的正当化のいかなる観念もここでは予め遠ざけられている＞と言明している（p. 155）。だが、ヴァレリーは盲目的に合目的論に依拠しているわけではない。『固定観念』において（p. 42）、^{フィナリスム}合目的論をその前提である＜anthropomorphisme＞批判を通して批判してもいるからである⁹³⁾。ヴァレリーが精神分析に対して合目的論的思考を行なったのには、彼の＜システム＞概念の要請があるのだが、それについて論じる前にブルトンの比較でもうひとつ指摘しておかななくてはならないことがある。ブルトンにとって因果論的決定論を排す上で、それが唯一ではないにしても、重要な論拠のひとつとなっていると考えられるのが、『固定観念』で言及される、例のアインシュタインの相対性理論である。カルージュは、シュールレアリスムがアインシュタイン、ボーア、ハイゼンベルグ、ド・ブローイ、リーマンなどによって物理学、数学の大変革が推進された

時代を背景にして生まれたという事実を強調し、シュールレアリスムの方法論的意識と現代物理学の動向との並行関係を指摘している⁹⁴⁾。カルージュによれば、ブルトンはアインシュタインに2度ほど言及している⁹⁵⁾。すなわち『失なわれた足跡』(1924年)に収められている『侮蔑的告白』と『マックス・エルンスト』においてである。前者の中でブルトンは次のように言う。

「<Sans aucune affectation, je puis dire que le moindre de mes soucis est de me trouver conséquent avec moi-même.>⁹⁶⁾

『侮蔑的告白』はブルトンにとってその印象を消し去ることのできない存在であり、麻薬の服用で自殺したジャック・ヴァシェを回想したものである。⁹⁷⁾その係わりにおいて後のナジャの場合と同様に、悲劇的な結末を体験させられることになったブルトンの苦悩が色濃くにじんでいるこのテキストの中で、上に引用した文章は見逃すことができない。<後件>(conséquent)を言うためには<前件>(antécédent)を必然的に要請し、両者がある統一された関係を結ぶためには、時間的・空間的次元での自己同一性を前提とし、同時に、そうであるからこそ、自己同一性も保証されることになる。ブルトンが後件性＝首尾一貫性を否定するということは、このような意味での自己同一性を拒否することに他ならない。彼は、すぐ続けて言っている、

「<<Un événement ne peut être la cause d'un autre que si on peut les réaliser tous deux au même point de l'espace>>, nous apprend Einstein. C'est ce que j'ai toujours grossièrement pensé.>⁹⁸⁾

『ナジャ』においてそうであったように、ヴァシェと係わった自己そのものを問い、現在の自己が因果論的決定論の桎梏の中に閉じこめられかねないことを恐れて、アインシュタインを援用していることは明らかだろう。カルージュが名前は挙げていないものの、アインシュタインの(特殊)相対性理論を念頭に入れた言葉と指摘している⁹⁹⁾のは、次のようなブルトンの言葉である。

「<La croyance en un temps et un espace absolus semble prête à disparaître. (...)>¹⁰⁰⁾

これは、ニュートン以来の古典物理学における絶対空間・絶対時間概念がアインシュタインの特殊相対性理論によってその限界を指摘されたことを述べている。特に、絶対時間に関しては、アインシュタインが座標系(慣性系)に係わりなく同一の時間が流れるという、それまでのア・プリアリオリな前提に対し、時間の相対性を主張したわけである¹⁰¹⁾。ブルトンがアインシュタインの教えと言っていることを再構成してみよう。二つの出来事が因果関係で結ばれるのは、それらが<空

間の同じ点」で生じた場合に限る。この留保は特殊相対性理論の立場からなされている。二つの出来事が「空間の同じ点」ではなく異なる場所で同時刻に起きた場合を仮定すれば？もともと時間は座標系（観察者の位置）とは無関係であると前提されているから、この同時性は自明なものと認められ、時間的前後関係も自ずと一義的に決定されて、前の出来事と後の出来事との間に因果関係を立てることが可能となる。こうして、古典物理学では時間的前後関係は因果関係に等しく、その因果関係は座標系とは係わりなく同一である。しかし、特殊相対性理論の立場に立てば、同時性は座標系に依存しているから、その一義的決定性は相対化される。つまり、特殊相対性理論はこのような因果関係としての時間的前後関係の持つ絶対的意味を突き崩したことになる¹⁰²⁾。ということは、ヴァレリーもブルトンも、側面からみれば、一方は3つの事件について、他方はヴァシュとナジャとの関係において、時間的前後関係を通して因果論的決定論を一応は行っているということであり、そうであってこそ、両者のアインシュタイン参照である。ところで、『固定観念』のヴァレリーはアインシュタインをその十全な意味において援用したことになるのだろうか、＜医者＞に＜実験＞ではなく＜体験＞を、固定観念の原因である体験を問い質される破目になるとき？1929年9月12日のカイエにおいて、ヴァレリーはアインシュタインの講演の印象を語っている。その中に、『固定観念』で引用されている相対性理論の創始者の言葉が、ある一節の傍注として、そっくりそのまま記されている。その一節とは次のようなものである。

＜Il développe son incertitude et sa FOI *fondée* sur l'architecture (ou beauté) des formes.＞(XIV-107; PL. C. II. p. 875)

＜フォルムの建築(術)＞とは、恐らく、アインシュタインがガリレイ変換とローレンツ変換の矛盾を解消して古典物理学体系をその部分とするような包括的な総合の試み、特殊相対性理論を構築したことを指すだろう。このようなアインシュタインの問題意識がフォルムの重視という点で、ヴァレリー自身の＜システム＞概念と呼応するわけである。ヴァレリーは言葉を続ける、

＜Ceci me touche intimement — Einstein peut procéder comme j'aurais voulu procéder — par voie des formes.＞¹⁰³⁾

ヴァレリーがアインシュタインを語ってフォルムに固執するのには、それなりの理由がある。彼が＜システム＞を構想するとき、身体と世界との関係において、＜機能＞という面から見た人間精神の活動様態を＜表象＞(représentation)することを原則に立てる。つまり、個々の精神活動の内容とその原因は予め捨象され、そのかわりに、精神の機能という意味でのフォルムが強調される。そうであってみれば、『固定観念』が出版される前にすでに自分の立場を補強してくれるこ

とを確認しておいたアインシュタインの相対論に対して、作者はこの作品において全く相反する論点を提示していることになる筈だ。なぜなら、《医者》が問い詰めているのは、たとえば、《私》の行う《固定観念》という用語の不当さに対する批判に典型的に見られるように、定義上固定できない観念というものが他の観念よりも大きな確率で回帰してくるのが固定観念と呼ばれているものの素性なのだという、観念のフォルムとしての性質、従ってフォルマリストであるヴァレリー＝《私》の立場ではなく、まさに、そういうヴァレリー＝《私》を苦しめている固定観念の内容、つまりは、フロイトにおけるような原因としての体験であったからである。カイエの断章とその後にかかれた作品との間にその急所において明らかな対立があることからすれば、このような対立に作者が無自覚であったなどと考えの方がむしろ背理だろう。これは、《システム》概念の根底に横たわる排除の機制に対するヴァレリー自身の自覚に関連を持つ¹⁰⁴⁾。その排除とは、《システム》の構築の際に、原因と結果を直線的に結びつける《説明》(explication)を予め拒否し、《表象》(représentation)を採用するヴァレリーの姿勢を意味する。ヴァレリーにとって《説明》(explication)とは、フロイトが自由連想法、失錯行為、転移を通して無意識的心的過程を証明しようとした心的決定論¹⁰⁵⁾と同じように、原因を深さとして探し出す因果論的思考様式に他ならない。しかし、すでに述べたように、一方で、自分が排除した筈の《説明》をカイエにおいてヴァレリーは実践しているのだ、1892年、1920年、1931年と列挙することによって。1892年のド・ロヴィラ事件が最も大きな原因となって書くことになったそのカイエにおいて、心的現象の原因を目指す《説明》ではなく、その機能を記述する《表象》が問題なのだと表白しておきながら。このような根本的な矛盾をヴァレリーの的に解決しようと試みられたのが、『固定観念』に他ならない。

この解決をヴァレリーはまさに《expliquer》という語に対してある角度から照明をあてることによって図ろうとする。まず、《私》と《医者》の交換を引用してみよう。

M : <[...] Comment expliquez-vous que recevant, un beau matin, une lettre, une lettre... foudroyante, — mais qui demandait cependant quelque attention pour en saisir toute la portée, — à peine ouverte, et vue plutôt que lue, j'ai ressenti l'affreuse sensation d'un coup de couteau dans le foie?>

D : <Mais je n'explique pas. Ce n'est pas qu'on ne puisse bâtir une phrase momentanément satisfaisante, — palliative...>

M : <Et comment expliquer qu'une idée, un sujet de préoccupation pénible, qui se trouve actuellement écarté, absent, dissimulé entièrement à l'esprit par quelque autre objet d'attention dont on se croit tout occupé, vous soit brusquement, brutalement rappelé, non par une <association d'idées>, — comme on dit, — mais par un pincement subit

<Autre chose> あるいは <ex(-)pliquer>

dans la région du cœur?>

D : <Profondeur, profondeur...>(pp. 51–52)

<私>が<医者>に執拗に求める<expliquer>の背後にあるのがヴァレリーの<システム>において排除された<説明>, 言い換えれば, フロイト的<説明>であることは明らかだろう。フロイトが夢や失錯行為の説明において従来の生理学的説明の不十分さを指摘したことに対して, <私>は当の生理学的現象を強調していること, しかも, 「いわゆる<連想>によってではなく」と強調しつつ前もって注文をつけていること, 以上の点において, <私>と<医者>の交換はフロイトの自由連想法のパロディーであるという解釈はここにもう一つの本質的な論拠を持つ。だが, <expliquer>をめぐるもう一つのレベルがある。<医者>は<私>との言葉の交換の過程で, <私>が<不安神経症者> (<anxieux>) に見えると診断する (p. 100)。すると, <私>は<不安神経症者>なんかではないと一度はつぶやきながら, 結局, そういう可能性もないのではないと語気を柔らげるのだが, その途中である留保をつけてこの診断を受け入れている。

Je suis anxieux... dans la mesure où un homme auquel on serre la gorge est ... asthmatique. Lâchez-le : il est guéri.>(p. 101)

ヴァレリーはここで語源遊びをしている。『若きパルク』の作者にとって貴重なレオン・クレダの語源辞典によれば, <anxieux>, <angoisse>, そして<mal qui serre la gorge>としての<angine>も皆, ラテン語の<angere>を語源に持つ縁語である¹⁰⁶⁾。ところで, この語源遊びをフロイトに結びつけるのも一興だろう。彼も『精神分析入門』の第3部神経症総論第25講不安において<Angust>の語源, <angere>の名詞形<angustiae>を指摘している¹⁰⁷⁾。この偶然の一致は, われわれの立論からすれば, 単なる偶然とも思えないが, それはともかく, もっと重要なのは, <私>が少し先で, <anxiété>という言葉に, <相対的な>, <自然な>という形容詞とともに, <explicable>という語を付け加えていることである。<anxieux>についての語源遊びをしている対話の流れにおいて考えるなら, <explicable>という何の変哲もない形容詞は別のニュアンスを帯びることがわかるだろう。自分が<不安神経症>を患っているのなら, それは, 喉を締めつけていた手をゆるめればそれまで呼吸困難であったのが元の正常な呼吸に戻る, その程度の病だと<私>は言っていたのだ。 <angere>の意味である<serrer>と<lâcher>との間には, 収縮と弛緩の対立するイメージがあることは言うまでもない。ところで, <expliquer>は<ex>と<pliquer>に分かれ, その語源的意味は<皺(襞)を伸ばす>である。そうすると, <explicable>は「説明可能な」という通常の意味の他に, そういう意味を派生させた語源からして, 収縮と弛緩あるいは展開の2つのイメージを集約していることになる。この<expliquer>と

いう語の語源的意味の使用については、『固定観念』の執筆された時期より前の1929年のカイエにヴァレリーは夢の素材について夢は引き延ばされ保持されるためにありとあらゆる素材を借りてくるという文脈で、次のような言葉を書いている。

〈[...] pour *expliquer* (au sens *hypnotique* du mot) la situation—sensation, [...]〉(XV—210; PL. C. II. p. 148)

これに、たとえば、「夢がよく非難されるような眠りの妨害者ではなく眠りの守護者であり、眠りの妨害者を取り除く役目を果たすものであることはすでにわかっている」というフロイトの説¹⁰⁸⁾を重ね合わせて見ればよい。ヴァレリーはすでに〈expliquer〉を語源的意味——〈展開する〉——を踏まえて使っていることが判明する。¹⁰⁹⁾

この〈展開する〉という意味での〈expliquer〉の使用はその意味連関によってある文句へと送り返す。〈医者〉が〈人間において最も深いもの、それは皮膚である〉(p. 48)と、〈私〉が言ったか書いたかしたのは本当かと尋ね、そうですという返事をもらうと、それはどういう意味かと説明を求める。〈私〉はこの逆説的な言葉の意味を種明かしして、〈深いということ〉、それは〈感じること、苦しむこと、思考すること〉のなせる業であり、人間がそういう深さの体験をするのは、そもそも、〈外胚葉〉に〈repli〉(皺(襞))が出来て中枢神経を形成しているからだと言う(pp. 49—50)。深さではなく表面のレベルで言葉を交わすという対話部の最も基本的な設定において、なおかつ、そういう表面のレベルで対話が話題の多岐性という形で進行しながらも、深層が一瞬、露呈してはまた、潜行することによって対話に寄り添っているという構造において、さらに、その深さとしてあるものが実は、〈私〉の固定観念の病因である性愛体験に他ならないと想像させるテキストの機微において、〈repli〉は、女性性器を連想させ、心的外傷体験が刻印されている記憶の脳内過程の局所を類推させるだろう。そればかりではない。〈repli〉は〈ex-pliquer〉の縁語である。このような重層的意味連関を持つ〈ex-pliquer〉は『固定観念』の対話部のフォルムと不可分の関係にある、というか、まさにそのフォルムそのものである。

『固定観念』の序文は対話部がそうであるように、論理の上で屈折に満ちている。冒頭でヴァレリーはこの作品が「あわただしく産み出された」と断っている。その理由として、原稿の締切期限がさし迫っていたことを挙げる。この「外的束縛」の結果、「みずから作りあげてあった美しい規範を無視し」、「厳密さを弛め」、「もっとも抵抗の弱い回路にしたがい」、「自分の要求に対しては偶然によって答えた」と弁解する。「だが」と、ヴァレリーは続ける、「これこそは打ち解けた対談のなかではいつでも認められる」。ここまで読むと、『固定観念』のあの対話部がまるで、時間にせき立てられたための窮余の策として採用されたのだと読者に信じ込ませるかのようであり、又、そのように解するのが自然だろう。ところが、序文末尾でヴァレリーは何とっているか？

＜Autre chose＞あるいは＜ex(-)pliquer＞

＜Quant à la forme, l'Auteur, sollicité de près, (comme on l'a dit), de mener rondement son ouvrage, a donc pris le parti d'imputer le désordre de son esprit sous *pression de temps* au désordre et à la divagation naturelle d'une conversation toute libre; et il a dû se résoudre à écrire *comme on parle*, [...]＞(p. 8)

＜donc＞の前後の論理的脈絡はすんなりとは呑みこめない。締切期限の切迫という事情を否定するつもりはない。恐らく、そうであったのだろう。しかし、もし、そういう事情であったのなら、＜imputer＞の2つの目的語を入れかえておけば弁解は一応果たせるのではないかと考えるのは我々だけだろうか。いくら、「厳密さを弛めた」と明言しているからと言って、ヴァレリーがこんな簡単な論理上の手続きを無自覚に誤まるなど、到底考えられまい。ヴァレリーがこの序文で、＜全価可能性＞と＜錯綜体＞の概念が心理学において持つ価値を迂言法で述べ、それをフロイトの精神分析学理論との競合をはのめかすものであるとわれわれは解釈した。又、対話部のフォルムが、『ナジャ』の作品構成を転倒した自由連想法のパロディであるとも主張した。上に引用した文章の中の＜conversation toute libre＞はそれこそフロイトの＜association libre＞を連想させはしないだろうか。そういう風に見てくると、序文には作者のある底意があり、序文と本文の対照という特徴を通して『固定観念』という作品の中へ読者を誘い込み、そのフォルムの意味を探るように意図的に仕向けているとしか思われぬ。その同じ序文で、ヴァレリーは対話部において重要なのは、そこで言われている観念よりも、言葉の交換そのものであると指摘している。観念は＜アクセサリー＞にすぎず、二人の対話者が語り合っていることは、「語りうるかもしれぬ一連のことがらの＜最初のいくつかの項＞」にすぎないというわけである。だが、たとえアクセサリーであるとしてもそういう観念が全く邪気のないものではなかったことは、われわれがフロイトとブルトンを媒介項にして摘出してみせた通りである。語られていることが氷山の一角のように、語られていないことに比べれば微々たるものだというのは、表面と深さの二重性においてそのまま実現されているだけに、締切期限の切迫とかの外的条件のために語り尽くせなかったのではなく、まさに語り得ることと語り得ないこととの境界において＜迅速さを本質とするゲーム＞(pp. 7-8)を＜ex-pliquer＞しているのである。外胚葉に出来る＜repli＞、苦悩の元凶である＜repli＞について述べた少し後で、＜私＞は＜repli＞にしまわれて思い出として蘇える固定観念を次のような譬喩で言い表す。

＜[...] Il y a quelques gros tyrans qui agissent sans s'expliquer... [...]＞(p. 50)

あるいは又、＜私＞は自分達の対話のフォルムを、外胚葉のことを述べるのに使った同じ言葉で、

＜l'enveloppe externe de nos débats＞（p. 71）と形容している。アインシュタインに戻ろう。
＜私＞は一般相対性理論を説明するのに、＜一枚の平らなゴム板＞を＜医者＞に想像させ、その上に3角形を描かせる。そして、次のように言う。

＜Maintenant ployez, tordez, tirez comme vous voudrez votre feuille élastique. Qu'est-ce qui subsiste de ces propriétés?＞（p. 151）¹¹⁰⁾

そう聞かれても＜医者＞はどう答えていいのかわからない（あるいは、わからない振りをする）ので、＜私＞は、平らであったゴム板の3角形から（ユークリッド）幾何学が出来るように、＜ployer, tordre, tirer＞——＜plier＞に関連する言葉！——によって皺のよったゴム板の3角形から＜ゴム板の変形に相応する＞幾何学ができる筈だと言ひ足す。＜私＞の説明は、表面上は、一般相対性理論と非ユークリッド幾何学の本質的な関係¹¹¹⁾を言っている。だが、このような説明を構成しているイメージは、アインシュタインの理論が＜repli＞を＜ex-plier＞したということであり、＜理論と実（体）験の間には云々＞の言葉に隠された意味を指摘したように、外胚葉の＜repli＞に記憶されている心的外傷体験とそれを克服するための理論——ヴァレリーにおける＜システム＞——との連関をほのめかしている。だからこそ、＜私＞は＜私たちが話し合っていることと何か関係があります＞と言ってアインシュタインの言葉を引用するのだし、＜関係がなければ、私たちが関係を与えてやればよい＞と言った＜医者＞が結局、＜私＞を窮地に立たせるのであった。事実、＜私＞は固定観念を暗に示す口吻で次のように言っている。

＜Et nous en sommes encore à chercher le secret du modeste caoutchouc? ...＞（p. 162）

テキストの身振りは、あたかも、1892年、1920年、1931年の出来事が刻まれている＜repli＞を連続と変転による話題の多岐性という形で＜ex-plier＞しているかのようだ。神経の網状組織にも似たその＜展開＝説明＞形式が、フロイト流の＜説明＞形式を支える自由連想法のパロディーであるとき、ヴァレリーがなにを意図して『固定観念』を書いたのかという問いに必然的に至らざるを得ないだろう。対話部の終わり近くで、＜私＞は、いろいろ馬鹿なことを言って来ましたが、何が何でもそうするだけの必要があったのだと言うと、＜医者＞が＜診察してもらいたかったのですか＞と聞き返すので、＜Non. Cure.＞（p. 171）と答える。すると、＜医者＞——＜A mes dépens?＞。それを受けて、＜私＞——＜Que voulez-vous!＞。ヴァレリーは自己演出をしている。自己を＜私＞と＜医者＞に振り分け、両者の＜交換＞に自由連想法の形式をまわせることによって、しかし、自由連想法のように＜repli＞に秘められた自分自身の体験を思い出として白日の下にさらけ出すのではなく。フロイトと患者との治療における関係を、＜説明＞す

る自己と<表象>する自己としてテキストに登場させること！これを対話部にさりげなく置かれている<私>の言葉を用いて言えば、<Similia similibus...> (p. 22) である！¹¹²⁾テキストではこの同毒療法の原則である文句の最後<curantur>を<私>は省いているが、その省かれた言葉がほぼ150ページ後で、同じく<私>によって補われている按配である。『固定観念』のヴァレリーをディドロと比較するとしたら、恐らく、その理由のひとつがここにある。ロビンソンとイエシュアは両者の類似性を対話篇のフォルムとの関係で指摘するだけにとどめ詳細な比較・検討に立ち入っていないが、特にイエシュアはディドロの『ラモーの甥』と『固定観念』との入念な分析を推めている¹¹³⁾。毒には毒をもって制するなら、フロイトが『精神分析入門』においてエディプス・コンプレックス概念の妥当性を補強するものとしてその一節を引用している¹¹⁴⁾『ラモーの甥』を、その対話のフォルムにおいて、自由連想のモデルとして、自由連想をもじる手口で逆用することほど、解毒の効果を高めるものはあるまい。そして、毒を云々するのなら、<Qui suis-je?> — <Est-ce moi seul? Est-ce moi-même?> というブルトンの『ナジャ』に呼応して、『固定観念』の<Tiens! Eh! Bon jour!> — <C'est moi-même> — <Je vous dis que je ne vous lâche pas. Un homme seul est toujours en mauvaise compagnie.>の転倒した作品構造をもう一度思い返す必要があるだろう。ブルトンを因果論的決定論に追い込んだヴァシェおよびナジャとの体験が『ナジャ』に刻印されているように、『固定観念』にはヴァレリーの性愛体験が露骨に語られることなく語られている。あるいは、語られていることを通して語られていないことへと読者を誘うと言いかえてもよいだろう。それは、ヴァレリー自身が因果論的連鎖に縛られている自己の同一性を問い、その連鎖の発端となった事件への反省から考察していった<システム>概念の<説明－表象>の排除関係の矛盾を解決しようとしたことを意味する。そういう意味での<告白>である¹¹⁵⁾。言うまでもないが、『固定観念』を読んでもヴァレリーの内密な3つの出来事を具体的に、あからさまに告白した箇所はひとつとしてない。あるのは、『ナジャ』における程にも具体的な肉体と精神を備えた女性が言及されるところか、単に、<生理学的愛>の話題であり、<ex-pliquer>としての<交換>の表面と深さの二重性そのものなのだから。

ヴァレリーは序文で『固定観念』が<une œuvre de circonstance et tout improvisée> (p. 7) であると言った。そういう性質の作品は、アンリ・モンドールと、同じく友人である医者仲間とに捧げられているが、序文では単に、<もっとも注意深いひとびと>である<le corps médical>に<予定してあった>となっている。この事実は注目してよい。アンリ・エーによれば、<1930年頃>、器質的－機械論を信奉する精神科医と心理－力動論を信奉する精神科医とがフランス精神医学史上例を見ないくらい鋭く対立していた。これには、フロイトの精神分析学移入がからんでいる¹¹⁶⁾。<医者>は<Nous aurons bientôt une chaire d'Oneiromancie à la Faculté>と言っていた。エーは、1926年のパリ精神分析協会設立とほぼ同じ時期、<画期的な事件>として、<精

神分析に向かってパリの大学と病院の門戸》が開かれたことを挙げている¹¹⁷⁾。ブルトンの『ナジャ』が医学心理学会から告発を受け、一大センセーションを引き起こしたのが、1929年から1930年にかけてのことであった¹¹⁸⁾。第一次大戦下に出版された『若きパルク』を制作するときの、いかにもヴァレリーらしい、状況に対して一線を画し状況と作品の主題とを切離して考えた姿勢¹¹⁹⁾を思い浮かべるなら、『固定観念』は、意図を単刀直入に述べるところか幾重にもレトリックを駆使してそれを見透かされまいという配慮そのものによって、状況に積極的に身を投じた点で、ヴァレリーの作品の中でも異色の作品である¹²⁰⁾。一方にフロイト（精神医学界）を、他方にブルトン（文学界）を一種の攻撃目標に掲げ、後者にとっては作者であるヴァレリーとは無縁のところ、無類の文学的肖像である「テスト氏」の仮面をつけて、＜私＞＝ヴァレリーが登場する設定において。あたかも、実在の精神科医をモデルにした＜医者＞は引き立て役——＜医者＞の＜A mes dépens!＞とは又、このような価値を帯びる——であって、＜私＞＝ヴァレリーがフロイト及び文学的立場の関係からブルトンを誘い出し自由連想法という曲に合わせて『ナジャ』の作者と踊っているかのようである。敵意を秘め、親しげに。われわれがヴァレリーの自己演出と言ったとき、そこには、＜ex-pliquer＞＝＜échange＞による固定観念の治療という意味の他に、このような競合意識をも指している。そうでなければ、ヴァレリーが病床のベルグソンを見舞ったとき、『固定観念』について語り合い、あれは、＜Farce Alimentaire＞ですと自ら規定している（XV-627）ことはどのように解釈できるだろうか。ブルトンは『ナジャ』を＜扉のように開け放たれた書物＞として書いた。われわれの立論が恣意的でなければ、読者は扉を通して『ナジャ』の中に入りそれを読み終えたとき、扉がもうひとつ開け放たれているのに気づく筈だ。『ナジャ』がそうであるように、一個の迷宮にも似た『固定観念』が＜Qui suis-je?＞——＜Est-ce moi-même?＞の問いに＜C'est moi-même＞と答えているのに気づく筈だ。『固定観念』が書かれている時期の1931年11月のカイエ——その2ページ前にわれわれがアンドレ・ブルトンと同定した＜Cet écrivain...＞の文章がある¹²¹⁾——に謎めいた文句が記されている。疲労の下にある思考がそれでも＜興奮価値＞として主体に働きかけることもあると言って、疲労している自分を奮い立たせるかのように、その＜興奮価値＞としての思考の例に次のような言葉がさりげなく置かれている。

＜si tu ne devines l'énigme, je te dévore＞(XV-370)

これはブルトンがナジャにしてみれば、＜雷にうたれてスフィンクスの足もとに横たわる男のように＞(p. 149) 映ったという、あのスフィンクスの言葉である。ヴァレリーはブルトンにスフィンクスの謎をかけたのだ¹²²⁾。『ナジャ』と『固定観念』は一組のテキストとして、惑星のようにお互いに遠隔作用で惹きつけ合いながら、互いに同じであるとも異なるとも言える内的原理で佇立

しているテキストとして、読まれなければならない。最後に、1962年ブルトンが自分の作品を全面改訂した際、その序文で、今度の改訂作業にはヴァレリーの旧詩改作に見られる〈不協和音と失敗〉は避けがたいのだがと述べる¹²³⁾とき、『ナジャ』というテキストはヴァレリーと不思議な因縁で結ばれた運命をたどっているということを言い添えておきたい。

注

- 1) C.N.R.S.版カイエ10巻468ページ。以後の引用のときは、X-468 というように表記し、本文に送る。なお、プレイアード版カイエにも収められている断章については、このファクシミリ版カイエの巻数とページ数のあとに、相応するプレイアード版の巻数とページ数を示すことにする。その際、プレイアード版は次のような略式表記を用いる。
PL. C. I. p. 281 : Paul Valéry, *Cahiers I*, <Bibliothèque de la Pléiade>, Gallimard, 1976, p. 281.
PL. C. II. p. 506 : Paul Valéry, *Cahiers II*, <Bibliothèque de la Pléiade>, Gallimard, 1974, p. 506.
- 2) Paul Valéry : *Œuvres I*, <Bibliothèque de la Pléiade>, Gallimard, 1975, p. 346. PL. O. I. と略す。原文の引用については、イタリックの部分が原文のもので、下線部は筆者のものである。日本語の引用については、特に断らないかぎり、著者のものである。
- 3) 大橋博司訳編『精神医学の源流』, 金剛出版, 1983, p. 175.
- 4) Paul Valéry : *L'Idée fixe*, coll. <idées>, Gallimard, 1966. 引用のときはこの版のページ数を本文に送ることにする。そして、引用文の頭にM, Dとあるのは、それぞれ、<Moi>, <Le Docteur>を指す。プレイアード版ではなく、このイデ版を使ったのは、ある重要な文句が前者においては脱落しているからである。この作品の厳密な校訂版はいまだに出ていないのは不思議としか思われない、ヴァレリーにとっても重要な作品であるにもかかわらず。とりわけ句読点などに関して、二つの版の間に異同がある。カライスカキスとシャポンのヴァレリー作品の書誌を参照したが、言葉の配列についてプレイアード版の誤りを訂正しているにもかかわらず、この脱落についてはどうしたわけか言及していない。
cf. Georges Karaïskakis et François Chapon : *Bibliographie des Œuvres de Paul Valéry*, Blazot, 1976, p. 247.
なお、手ごわい『固定観念』のテキストを読み解くに当たっては、筑摩書房版ヴァレリー全集3巻の、菅野昭正、清水徹両氏の訳業を大いに参照させてもらった。原文の引用以外で引くときは、そのまま忠実に訳文を採用したわけではなく、訳文をもとに自由に変えさせてもらったところもあることをお断りしておきたい。
- 5) Judith Robinson : <Words and silence in *L'Idée fixe*> in *M.L.N.*, may 1972, volume 87, p. 653. Karaïskakis et Chapon : op. cit., p. 244.
- 6) この〈交換〉の意味については本論文の結論部で論じることになるだろう。
- 7) 『固定観念』のフォルムに着目した論文には次のようなものがある。
Silvio Jeschua : <Autour de *L'Idée fixe*> (Réflexions sur la forme de l'informe) in *Europe*, juillet 1971, pp. 69-81.
Judith Robinson : art. cit. pp. 644-656.
Régine Pietra : <*L'Idée fixe* ou le mal de Teste> in *Cahiers Paul Valéry 2*, Gallimard, 1977, pp. 187-229.

特に、ロビンソンの論文は、精神医学の治療における＜non-dit＞と＜dit＞の存在を『固定観念』のテキストが実現していると主張している点で、われわれの論究に大いに示唆を与えてくれた。

- 8) Paul Valéry : *L'Idée fixe*, translated by David Paul, Pantheon Books, Bollingen series XLV-5, 1965, p. XIV.
- 9) ＜私＞も時間に対して、すなわち、過去＝固定観念に対して活動病を患っていると言うことができる。
- 10) 注4)で述べた、ブレイアード版で脱落している文句は、＜Le diable a ses vertus... Comment se guérir d'une idée?＞という＜私＞の言葉である。
- 11) これも、対話中で話題となる＜automatisme＞である。＜automatisme＞については、テキストにおいて現代文明批判の鍵語になっているが、もうひとつ別のレベルで言及することになるだろう。
- 12) このそそのかしは別の意味連関を持つことになるだろう。
- 13) アンリ・エレンベルガー『無意識の発見』木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1986、上巻 p. 424、下巻 pp. 138-139.
- 14) これも、後でもう一度触れる。
- 15) L. シェルトーク、R. ド・ソシュール『精神分析学の誕生』、長井真理訳、岩波書店、1987、pp. 213-214.
人文書院版フロイト著作集10巻『精神分析について』p. 147.
- 16) 人文書院版フロイト著作集1巻 p. 18.
- 17) 同書 pp. 20-26.
- 18) 同書 pp. 27-28.
- 19) フロイトはエディプス・コンプレックス概念について『ハムレット』を引き合いに出す（人文版著作集10巻『精神分析について』p. 169）が、『固定観念』の英訳本の注によれば、ヴァレリーはそのハムレットの最後の科白を使って次のような言葉遊びをしている。
①＜Bon souper, bon gîte, et ce reste＞（p. 37）（ラ・フォンテーヌからのものじり。ヴァレリーは＜le＞を＜ce＞に変えている。）
②＜Et... le reste?＞/＜Le reste est silence?＞（p. 98）
（後半がハムレットの科白。）
③＜Laissons l'art d'accommoder le reste, [...]＞（p. 98）
（フランス料理の用語のものじり。ヴァレリーは＜les restes＞を＜le reste＞に変えている。）
テキストにおける＜reste＞は、衣・食・住の衣ではなく、固定観念に結びつく性交をほのめかしている。エディプス・コンプレックスについては、後で触れる＜錯綜体＞概念を参照。
- 20) Elisabeth Roudinesco : *Histoire de la psychanalyse en France I*, Seuil, 1986, p. 350.
- 21) *ibid.*, p. 274.
- 22) エレンベルガー、前掲書、上巻、p. 133 以下。少し後で言及することになる＜Autre idée＞——＜Gare dessous＞という二人の交換に続いて、＜治療医学＞の変遷が話題となる中で、＜私＞はその変遷を次のような文句で言い表す。——＜Ce qui guérit en 1880 nuit en 1890.＞（p. 112）この2つの年代は、シェルトークとド・ソシュール（前掲書 p. 86）によれば、ヴァレリーが書いたこの年代通り、10年間にわたってシャルコーのサルペトリエール学派とベルネームのナンシー学派が対立した期間——＜催眠の枠を越えて精神分析の到来を準備する＞期間——を指す。又、エレンベルガー（前掲書、下巻、pp. 396-417）は、1882年から1893年と、年代は少しずれているものの、＜若干修正された動物磁気催眠術と暗示法の名の下に復活した＞時期として、両学派の対立期間をほぼ19世紀末のこの時期に置いている。
- 23) Robinson : *art. cit.* p. 645. ＜医者＞の言葉にある＜fumée＞は沖に浮かぶ船の＜煙突＞を暗示する

ものである。ロビンソンの指摘と本論文の主旨からして、ここにある象徴的価値をみるのは、うがち過ぎだろうか。つまり、この<煙突>は、フロイトが『精神分析について』（人文版10巻 p. 142）（ボントリスとラプランシュの『精神分析学辞典』によれば、1921年の仏訳：Cinq leçons sur la psychanalyse に収められている）の中で、ブロイアーがカタルシス療法を施したアンナ・O嬢がこの治療を<談話療法>あるいは<煙突掃除>と読んだと述べているのである。フロイトを参照するとき、『固定観念』が出版された1932年までに仏訳された著作を考慮しているが、残念ながらこの年までの仏訳本に当たることはできなかった。

- 24) エレンベルガーは、催眠術と後に呼ばれることになる磁気術のメスメルと被魔術のガスナーとを『出エジプト記』に出てくるモーゼとエジプトの<妖術師>との対決になぞらえている（前掲書、上巻 p. 65）が、この<私>の文句も、実は少し前で（pp. 116-117）言われているように、同じ出典からのものである。
- 25) 対話部には、<autre chose>という言葉がこの連想の意味で随所に出てくる。
- 26) ヴァレリーにおける<subconscient>と<inconscient>の区別の曖昧さについては、次の研究書を参照。
Nicole Celeyrette-Pietri : *Valéry et le Moi*, Klincksieck, 1979, p. 312.
Régine Pietra : *Valéry, Directions spatiales et parcours verbal*, Minard, 1981, p. 89.
- 27) cf. XIV-554. あるいは、本論文の結論部を参照。
- 28) *L'Idée fixe*, translated by David Paul, p. 94.
- 29) このように言葉を補って訳しているのは、筑摩版の翻訳とテキストの文脈とからによるが、ここは後でもう一度触れる。
- 30) 本論文第2部のアンドレ・ブルトンとの比較を参照。
- 31) シェルトーク、ド・ソシュール前掲書、p. 6.
- 32) 本論文第2部と結論部を参照。
- 33) ヴァレリーの構想する<システム>概念である。
- 34) ヴァレリーの<システム>における<Demande-Réponse>の主題。これについてはブルトンの『ナジャ』にも関係する。
- 35) パパンスキーは、フロイトがシャルコーの下に留学したとき（1885-1886）（cf. エレンベルガー前掲書、下巻 pp. 21-22）、短期間ではあるが、彼と同僚であった。cf. Marthe Robert : *La Révolution psychanalytique*, I, pbbp, Payot, 1979, p. 86.
- 36) Marguerite Bonnet : *André Breton, Naissance de l'aventure surréaliste*, Corti, 1975, p. 70, p. 81.
- 37) *ibid.*, p. 98.
- 38) この時期のブルトンとヴァレリーの交流も含めて、両者の関係は機微に触れたところまではわかっていないのが実情である。清水徹氏が述べているように（『潭』8号「テスト氏の謎」, 1987, p. 93）、両者の往復書簡が公開されれば、この現状も大きく打破されるだろう。
- 39) Bonnet : *op. cit.*, p. 99.
- 40) *ibid.*, p. 102. Roudinesco : *op. cit.*, p. 245.
- 41) Roudinesco : *ibid.* p. 274.
- 42) ただし、フランスではじめてフロイト理論を擁護したのは、Morichau-Beauchant である。人文版フロイト著作集10巻『精神分析運動』p. 278.
- 43) フロイトに関する情報源になったのではと推測される人物には、<医者>のモデルであるパリの精神科医ルイ・ブールが考えられるだろうが、ロビンソンによれば、ヴァレリーの妻方の身内に精神科医ジュリアン・ルアルもいる。cf. Judith Robinson : *L'Analyse de l'esprit dans les cahiers de Valéry*, Corti, 1963, p. 105.

- 44) アンリ・エー『ジャクソンと精神医学』大橋博司・三好暁光・浜中淑彦・大東祥孝共訳、みすず書房、1979. p. 26.

なお、この本には、エーがすぐ上の注で名を挙げたルアールと共著で書いた、イギリスの神経学者ヒューリングズ・ジャクソンに関する紹介論文がそのまま収められている。この論文は、最初、例の『脳髄』誌に1936年に載ったものである。彼等は論文を単行本として出版するとき、彼等の師から序文をもらっているが、その師とは、ブルトンが『ナジャ』の中で揶揄しているアンリ・クロードである。

実を言えば、クロードは『脳髄』誌発刊（1906年）に一役買った人物である。（cf. Jacques Postel et Claude Quérel : *Nouvelle Histoire de la psychiatrie*, Privat, 1983, p. 455.）

しかし、アンリ・バリュクは『脳髄』誌は1881年に創刊されたと言う（cf. アンリ・バリュク『フランス精神医学の流れ』中田修監修、影山任佐訳、東京大学出版会、1982, p. 238）。だが、ポステルとケテルの上記の精神医学史によれば（p. 574）、1881年刊の『脳髄』誌は1888年までしか出なかったもので、クロード達は旧誌の名前をそのまま使って復刊したと推測されるが、目下、確実なことはわからない。

- 45) André Gide—Paul Valéry : *Correspondance* 1890—1940, Gallimard, 1973, p. 197.
46) Henri Pastoureaux; <Des influences dans la poésie présurréaliste d'André Breton> in *André Breton, essais et témoignages*, Baconnière, 1949, p. 146.
47) cf. PL. O. I. pp. 1167—1168. Pietra : op. cit., p. 103.
48) André Breton : *Nadja*, Gallimard, 1958, pp. 189—190.

以降の引用においてはページ数を本文に送ることにする。次の翻訳を参照した。

巖谷國士訳『ナジャ』、白水社、1986.

清水徹訳『ナジャ』（<世界の文学>所収）、中央公論社、1971.

原文以外で引用するときは、『固定観念』の場合と同様、2つの訳書から自由に、言葉を一部変えたりして引用したところもあることをお断りしておきたい。

- 49) <医者>が<rochers>と言っているのは、プロローグにおいて、<私>が固定観念に苦しめられながら通りをあてどなくさまよい、固定観念をふりはらうために海岸の岩場をよじ登ったり飛んだりしたことを指す。医者洞察力と言ってしまうとそれまでだが、すぐ後の対話で<医者>は<岩場>で何をしてたのかと、改めて<私>に訪ね、予想通りの答えが返ってくる。作中人物の知の配分としては、いささか出来過ぎのようであるが、これに関しては結論部で考察することになるだろう。
- 50) André Breton : *Les Pas perdus*, Gallimard, 1949, p. 12.
51) André Breton : *Entretiens*, coll. <idées>, Gallimard, 1973, p. 140.
ただし、ブルトンはヘーゲルからこの用語を借りて来ている。
- 52) <ジェノヴァの夜>と呼ばれている、この事件の神話化については、清水徹氏の次の論文に依拠する。
「いわゆる<ジェノヴァの夜>について——神話解体の試み」、明治学院論叢第 390号、1986, pp. 45—83.
- 53) このようなヴァレリーの意味合いは後で述べる。cf. Breton : *Nadja*, p. 206.
54) この事件は<ブルトン、ツァラ双方の誤解にもとづくもの>であった。cf. 清水徹訳『ナジャ』p. 98.
55) <原子価>を意味する<valence>という化学用語に基づいた造語。筑摩版ヴァレリー全集 3 巻 p. 294 参照。
- 56) 『ナジャ』は、デュロゾワとルシエルボニエによれば、1927年の秋に、ヴァレリーがレオン＝ポール・ファルグ、ヴァレリー・ラルボーと共に創刊した『コメルス』誌にその一部が載っている。cf. Gérard Durozoi, Bernard Lecherbonnier : *André Breton, l'écriture surréaliste*, coll. <thèmes et

textes＞, Larousse, 1974, p. 111.

それは、同誌の13号で、『ナジャ』第1部とあって、冒頭の＜Qui suis-je?＞から、ナジャとの出会いの物語が始まる直前までの部分である。われわれが使った『ナジャ』26版と照会してみると、写真は皆無であり、2箇所ほど語句が全く異なっている他、句読点、文字、行間のとり方に弱干の違いはあるものの、テキストの読みを深甚に変えるものではない。

- 57) バリュク、前掲書、pp. 203–231. バリュクによれば、＜隔離と禁治産＞に対して精神障害者を擁護するこの法律は、100年後の1938年に、一部改正されて、＜措置入院から同意入院への変更を可能とする方法を採用＞している。

- 58) 音声に出してよめば＜désespoir＞となる。

- 59) ＜私＞は、われわれが＜personnalité＞（個性・人格）と呼びそれを自己同一性として引き受けているものは、われわれの中に潜在している観念や行為の諸要素の多様な組合せの一つが発露したものにすぎないと、＜personnalité＞批判を行う（p. 102）。すると、話はその＜personnalité＞というものの形態である嗜好（goûts）に移る。＜私＞は＜医者＞から質問されて＜臓物料理＞は大嫌いだ、＜コーヒー＞には目がないと答える（pp. 103–104）。＜医者＞が、では、何年か先に、臓物料理とコーヒーに対する嗜好が全く逆になると考えますかと尋ねる。＜私＞はあり得ないことではないと言う。＜医者＞は質問の手を弛めないで、＜じゃあ、そうなったら、あなたの個性・人格はどうなるのですか＞と迫る。（最初の＜私＞の言葉は＜personnalité＞を受ける。）

M : ＜Se réduira, sur ce point, à un souvenir... d'ancien amour pour le café et d'ancienne haine des tripes.＞（＜goût＞から＜amour＞に変わっていることに注目。＜私＞の固定観念を思い浮かべること。）

D : ＜Vous voyez qu'il vous restra quelque chose.＞（フロイトの＜ほとんどすべての（ヒステリー性）症状は、強い感情をともなった体系の残渣——沈澱物ということもでき＞るという言葉（人文版著作集10巻「精神分析について」p. 143）と、『固定観念』における、精神病院での観察をもとにした話題（p. 141）、とくに、＜se coagulent＞と＜floculons＞の2つの動詞に注目。又、われわれが結論部でアインシュタインの一般相対性理論を＜ゴム板＞を例にとりて説明するヴァレリーの手口を分析するとき、ここの箇所をもう一度思い返すこと。）

M : ＜Peuh... Un souvenir isolé, et que rien ne renforce plus, est à la merci...＞（＜私＞の抵抗と口ごもり。ヴァレリーの＜omnivalence＞とフロイトの＜多元規定＞を思い出すこと。）

D : ＜Mais supposez qu'au lieu de tripes et de café, je vous aie parlé d'autre chose... Que, par exemple, je vous aie demandé si un... goût plus vif, plus violent, — qui puisse occuper l'esprit, non seulement à l'heure des repas, mais jour et nuit, pendant des mois, peut-être, des années, — un goût... passionné, un goût...＞（p. 104）

二人は何を語っているのか。無論、味覚の話ではない。＜医者＞は個性・人格が嗜好と同じように変わったとしても何かの思い出として残る、思い出が無意識の中に抑圧された形で残ることもあるのですよ、それが主体にとりついて離れないということも、と言っているのである。＜goût passionné＞はテキストの前の方で出てくる＜acumen＞（p. 36）のことを言っているのだ。つまり、＜私＞の性愛の固定観念が問題なのである。このような＜医者＞の攻撃を＜私＞が察したかのような交換がページ先に見られる。

D : ＜Enfin, je vous ai résumé...＞（p. 106）。＜医者＞は目的語に窮する（あるいは、そういう振りをする）。テキストの間！この間を突いて＜私＞はその目的語を＜L'état de la science. [...]＞と反射的に補う。確かに、表面上は、＜生化学＞の話がその間にはさまっている。だが、そうではないのだ。話頭の転じ方による＜私＞の抵抗！この屈折によって、アインシュタインのところですでにとりあげた＜生命科学＞が、＜気狂い女＞と形容されることになる＜生命＞が話題にのぼり、＜espoir＞の場

面に至っている。希望は、＜私＞自身のでもある。

- 60) 筑摩版ヴァレリー全集三巻, p. 295.
- 61) 事実, このすぐ後に, ＜生殖＞, ＜精子＞のことが話される。
- 62) André Breton : *Clair de terre*, précédé de *Mont de Piété*, suivi de *Le Revolver à cheveux blancs* et de *L'Air de l'eau*, coll. ＜Poésie＞, Gallimard, 1969, p. 28.
- 63) Bonnet : op. cit., p. 137.
- 64) ibid., p. 129.
- 65) ibid., p. 136.
- 66) 巖谷國士『ナジャ論』, 白水社, 1977, p. 64.
- 67) Bonnet : op. cit., p. 203.
- 68) ＜Monsieur V＞の中の言葉。cf. Breton : op. cit., pp. 28–29.
- 69) Pietra : art. cit., p. 228.
- 70) André Breton : *Manifestes du surréalisme*, coll. ＜folio-essai＞, Gallimard, 1985, p. 16.
- 71) Breton : *Entretiens*, p. 51.
- 72) Bonnet : op. cit., p. 375. Celeyrette-Pietri : op. cit., p. 313.

なお, ヴァレリーは『覚書と余談』において, ディオニュソスにとって自分を＜複製する＞ことができるまでに自分を理解するアポロンほど恐るべき敵はいまいと言っている (cf. PL. O. I. pp. 1201–1202) が, これは優れてパロディーの精神の定義である。

- 73) Nathalie Sarraute : *Paul Valéry et l'Enfant d'Éléphant, Flaubert le précurseur*, Gallimard, 1986, p. 44.
- 74) 『ナジャ』のブルトンは通りを一人で歩いていたとき, ＜客観的偶然＞によってナジャと出会い, 『固定観念』の＜私＞の言葉を借りれば, ナジャとの＜duo d'amour＞(p. 73) (ただし, ブルトンは苦々しい思いで, ナジャを愛していたのかと自問する。(p. 119)) において＜彼女を観察しすぎた＞(p. 119)ばかりに, かえって, 彼女における狂気の発症の重大性を洞察できず, その狂気を助長させたことへの罪の意識を刻印され, 彼女と別れることになる。それに対し, 『固定観念』のヴァレリーは, 同じく一人でさまよい, 同じくこの上ない偶然から, しかし, 未知の他者ではなく友人の＜医者＞に出会い, 友人としての睦まじさによって＜医者＞に言わば, 『ナジャ』的意味とは裏腹の, 悲劇味のない形で＜hanter＞されることになる。さらに言えば, 『ナジャ』における二人の出会いは, ブルトンが話しかけ, ナジャが＜微笑＞でまず答えることによって始まる (p. 79) が, 他方, 『固定観念』の二人の出会いは, ヴァレリーの方を振り向いた＜一人の男＞が彼に＜微笑＞したことで, ヴァレリーは友人の医者と＜reconnaître＞(cf. *Nadja*, p. 8. *L'Idée fixe*, p. 17.)する。なお, ブルトンのナジャに対する＜観察＞の問題は, すでに指摘しておいた, ブルトンあての手紙でヴァレリーが述べた精神病院訪問の印象が語られている対話の部分 (pp. 140–141) ——それは, アインシュタインの思い出への伏線ともなっている。——を参照。
- 75) 1927–8年に書かれたカイエの断章 (X11–722; PL. C. II. p. 1208) では, ＜AB＞という略号が＜Surr＞という略号とともに記されている。『固定観念』において＜外胚葉＞——これは後で論じる——が話題となるとき, ＜私＞は自分自身が作ったある逆説的な文句をさらに発展させて次のように言う。

＜[...] je complète ma formule : Ce qu'il y a de plus profond dans l'homme, c'est la peau, — en tant qu'il se connaît. Mais ce qu'il y a de... vraiment profond dans l'homme, en tant qu'il s'ignore... c'est le foie... [...]＞(p. 51)

2つの＜en tant que＞の節が本文に引いたカイエの断章と『固定観念』のテキストとにおいて全く同一であるのに注意しよう。ヴァレリーが深さ＝固定観念＝性愛体験を苦悩として生きているのと同様

に、ブルトンも深さ＝ナジャ体験を苦悩として生きているのだ。それを『固定観念』では一般化して述べているわけである。

- 76) PL. C. II. p. 506 の注 (p. 1602)
- 77) 清水徹「エロスの劇」、ヴァレリー全集カイエ篇 6, 月報 5. p. 5.
- 78) PL. C. II. p. 1602.
- 79) 恒川邦夫「ヴァレリーの愛」、『詩の世界』1977年, No. 9, p. 130.
- 80) 筑摩版ヴァレリー全集 3 巻の訳者の付記 (p. 296) に従う。
- 81) 恒川邦夫「『テスト氏』論のためのメモ」, 一橋大学研究年報人文科学研究 25, 1986, p. 19.
- 82) 同論文 p. 27.
- 83) ロビンソンはポジ事件の間に書かれた＜Rochers＞と題する小文が『固定観念』のプロローグを思わせると言っている。cf. PL. C. II. p. 1275 とその注 (p. 1649)
- 84) ヴァレリーの治療法が次に粗描されているが、これは後で論じる。
- 85) N・R・ハンソン『科学的発見のパターン』, 村上陽一郎訳, 講談社学術文庫, 1986, p. 108.
- 86) 人文版フロイト著作集 1 巻『精神分析入門』 p. 19.
- 87) cf. XV-356. フロイトとは＜別の分析法＞である＜auto-représentation＞をヴァレリーは論拠にしている。つまり、＜システム＞概念に基づいてのヴァレリーの反応である。因果論的決定論としてのフロイト流の＜説明＞は、＜システム＞における＜表象＞概念と真向から対立する。以下の行論を参照。
- 88) Gérard Legrand : ＜Monsieur Teste et le surréalisme＞ in *Magazine littéraire*, N° 188, octobre 1982, pp. 57-58.
- 89) 清水徹「＜告白＞をめぐる——ヴァレリーの場合」, 『潭』 3 月, 1985, p. 90.
- 90) cf. *L'Idée fixe*, p. 102. 注 59) の議論も参照。
- 91) cf. ＜Fluctuations sur la liberté＞(＜Oeuvres II,＜Bibliothèque de la Pléiade＞, Gallimard, 1970, pp. 951-969).
- 92) 巖谷國士前掲書 p. 29.
- 93) cf. XV-351.
- 94) Michel Carrouges : *André Breton et les données fondamentales du surréalisme*. coll. ＜idées＞, Gallimard, 1967, pp. 313-318.
- 95) *ibid.*, p. 313.
- 96) Breton : *Les Pas perdus*, p. 10.
- 97) 巖谷國士氏は、ナジャの入院に対する＜ブルトンの「責任」の自覚と呵責そのもの＞と同様、＜ジャック・ヴァシェの自殺をめぐるそれ＞が、ブルトンにとって、＜のちのちまでも尾を引き、ほとんど生涯を通じての固定観念になったと想定できる＞と言っている。前掲書, p. 93.
- 98) Breton : *op. cit.*, p. 10.
- 99) Carrouges : *op. cit.*, p. 313.
- 100) Breton : *op. cit.*, p. 102.
- 101) アインシュタイン, インフェルト『物理学はいかに創られたか』岩波新書下巻, 1986, pp. 38-49.
- 102) 内山龍雄『相対性理論入門』, 岩波新書, 1978, pp. 52-59.
- 103) この条件法の使用は、＜システム＞という人間精神の機能の仕組みを包括的に記述することを目指す試みが停滞を余儀なくされていること、その原因には＜システム＞内の根本的なある排除機制によるものであることをうかがわせる意味で、示唆的である。
- 104) この論旨は1986年6月1日立教大学で開かれた日本フランス語フランス文学春期大会で行った発表において、すでに述べたものである。本論文は、この発表の帰結である。

105) 人文版フロイト著作集10巻『精神分析について』p. 162.

106) cf. Léon Clédât : *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Hachette, 1912.

107) 人文版フロイト著作集1巻, p. 326.

なお、フランス語の〈anxiété〉, 〈angoisse〉とドイツ語の〈Angust〉の関係および前者2語相互の意味上の異同については下記の辞書を参照のこと。

Antoine Porot : *Manuel alphabétique de psychiatrie*, P.U.F. 1984.

ちなみに、同辞典の〈idée fixe〉の項には、参考文献として、ピエール・ジャネの *L'Automatisme psychologique* とヴァレリーの *L'Idée fixe* の2つがあがっている。ヴァレリーの作品が二重の意味における〈littérature〉として精神医学において市民権を得たということか。

108) 人文版1巻, p. 105.

109) 『固定観念』におけるこの意味を念頭に入れた使用例については, p. 50, p. 105 を参照。

110) 注59) の指摘を参照。

111) アインシュタイン, インフェルト前掲書 pp. 96-113.

112) そうでなければ、次のようなヴァレリーの述懐と嘆きはどのように説明されるだろうか。

〈Tiens, tiens, *l'Idée fixe*, chère Yanette, savez-vous que je crois ce livre une des choses les plus significatives que j'ai faites? C'est peut-être là, qu'avec un air pas sérieux, j'ai serré de plus près... quoi? ce qui se refuse, justement? Mais c'est un livre mal lu, mal compris...〉(cf. Cahiers du Sud : *Paul Valéry vivant*, 1946, p. 207.)

それと共に、〈医者〉の言葉——〈Je suis là pour vous faciliter l'expulsion.〉(p. 84) はプロイアーのカタルシス療法とフロイトの自由連想による治療とを陰画的に想像させる。

113) cf. Robinson : art. cit., p. 647. Yeschua : art. cit., p. 73.

『固定観念』の対話部には、ディドロの『ラモアの甥』だけでなく、『ダランベールの夢』, 『盲人書簡』を参照してみたい箇所があるが、今は措く。なお、『固定観念』が出版された後の1934-35年のカイエにおいて、ヴァレリーは自分を三人称で呼んで次のように書いている。

〈On l'a comparé à Descartes, à Racine, à Lucrèce,——à Diderot! Que de références!—〉(XVII-672; PL. C. I. p. 281.)

ヴァレリーをデカルト, ラシーヌ, ルクレティウスと比較したのは、それぞれ、モンドール, プレモン神父, アランである。『固定観念』が出版されて間もない、1932年5月12日と日付けのあるカイエの断章(XV-622)で、ヴァレリーはヴェガン(Weygand)将軍からテリーヴ(Thérive)の『固定観念』を扱った論文のことを知らされている。フェルナンダによれば、テリーヴは、『時代』誌でヴァレリーをディドロと比較して論じている。(cf. René Fernandat : *Autour de Valéry*, Arthaud, 1945, p. 163)

テリーヴの論文に関する2つの情報が同じ論文についてのものであるかは、わからないが、ヴァレリーをディドロに比較した一人にテリーヴがいることは間違いない。ちなみに、フェルナンダは、テリーヴが参照したディドロの作品は、*L'Entretien d'un philosophe avec la maréchale* であると言っている。

114) 人文版1巻 p. 279.

115) 本論文は、フォルマリスト・ヴァレリーを言えば白紙状態に置き戻して考察している。このようなヴァレリー像を一旦受け入れてヴァレリーにおける〈告白〉の不可能性を跡づけた論考に清水徹氏の論文(注89)に挙げた論文がある。この意味で、本論文は清水氏の「告白ざらい」の論文とド・ロヴィラ事件を扱ったもうひとつの論文(注52)参照)との間に位置する筈である。

116) アンリー・エー前掲書, p. 24 とその注①.

117) 同書, p. 26. なお、これを推進した一人が『ナジャ』にも関連するアンリ・クロードである。

- 118) 『ナジャ』における精神科医への憎悪（精神科医を殺すこと）（p. 185）——これは、ブルトンが精神医学上の制度に攻撃の矛先を向けることによって、ナジャの狂気を助長したという罪の意識から逃れ、その責任を制度に臆面もなく転嫁してそれに安住したということを意味しない——に対して、アベリイがこの学会の会合で告発の動議を出し、ジャネとクレランボーがその告発者として名を連ねる。

cf. Elisabeth Roudinesco : *Histoire de la psychanalyse en France 2*, Seuil, 1986, p. 43.

このような世論を巻き込んだ圧力に対するブルトンの反撃については次の論文を参照した。

André Breton : <La Médecine mentale devant le surréalisme> in *Point du jour*, coll. <idées>, Gallimard, 1977, pp. 88–93.

- 119) Paul Valéry : *Lettres à quelques-uns*, Gallimard, 1952, p. 123.

- 120) 注112)を参照。

- 121) このカイエ XV–368 には、『固定観念』の中で言及される主題についての一般的考察が記されているが、<Cet écrivain...>の下には、<Ennemis>が一語ぼつんとあり線で消されている。

- 122) 『固定観念』の対話部には、他の作家からの引用やもじりがたくさんあるが、ユゴーの『パリのノートル・ダム』とディケンズの『オリヴァー・トウィスト』との間の剽窃を云々する（p. 173）<私>の言葉は極めて示唆的である。作者は『ナジャ』に関してそっと手のうちを明かしている格好である。

- 123) André Breton : *Nadja*, coll. <folio>, Gallimard, 1986, p. 6.